375.9
Yo19
資料室

吉田彌平編

# 文國範師

第一部用

五卷

東京
光風館藏版

42622
教科書文庫
4
810
51-1931
~~200030~~
1927

教科書文庫
4
810
51-1931
2000301927

文部省檢定濟
昭和六年二月四日　師範學校國語科教科用

吉田彌平編

# 師範國文

第一部用

卷五

東京　光風館藏版

広島大学図書
2000301927

資料室
375.9
Y019

[illegible]
加[illegible]

山水の圖　（池野大雅堂筆）

廣島大學圖書印

広島大学
教
36275
図書

# 師範國文　第一部用　卷五

## 目次


一　櫻と國民性……深作安文　一
二　櫻の詞……賀茂眞淵　九
三　春の心……一三
四　隱岐の御遷幸……〔太平記〕一六
五　千劍破城の軍……〔太平記〕二三
六　愛兒の記念……藤岡作太郎　三七
七　夜叉王……岡本綺堂　四六

八　ものゝ上手……富士谷御杖　五
九　斑鳩の宮……三木露風　六二
一〇　法隆寺……高濱虛子　六六
一一　牡丹……七〇
一二　人の問に答ふ……藤田東湖　七三
一三　木下順庵……井上哲次郎　八一
一四　鎭西八郎……〔保元物語〕　八七
一五　新しい詩……高須芳次郎　九五
一六　鷲……土井晚翠　一一〇
一七　ヴェスヴィヤス……森林太郎　一一三
一八　登山……田部重治　一一九





一九　山國の歌……島木赤彥　一二四
二〇　百蟲譜……横井也有　一二九
二一　東路の旅……〔東關紀行〕　一三三
二二　月雪花……芳賀矢一　一三九
二三　縮むものゝ力……相馬御風　一四八
二四　大死一番……德富蘇峰　一五七

目次終



# 師範國文 第一部用 卷五

深作安文
○倫理學者
東京帝國大學教授 日本道德
文學博士
明治七年茨城縣東茨城郡生

## 一 櫻と國民性

深作安文

櫻花には梅花の清素はない。薔薇の濃艶はない。桃花の豐麗、牡丹の富貴はない。海棠の妖冶菊の高逸はない。けれども、其の咲きも殘らず散りも初めぬ爛漫たる樹頭に、鮮かな朝日の照添ふところは、げに百花の王たるに恥ぢないのである。長堤十里、雲か霞か、滿山一白雪か花か、人をして思はず快哉を叫ばしめる壯觀は、實に櫻に限るのである。朧月夜の櫻花は、人をして、恍惚として花神に接するの思あらしめる。巨松の間に錯落する

花は櫻木、人は武士、柱は檜の木、魚は鯛、小袖は紅梅、花は三吉野。（一休和尚）

落花に逝く春を惜んだ吹く風をなこその關と思へども道もせに散る山ざくらかな

八幡公　八幡太郎源義家

平薩州　薩摩守平忠度

俊成卿　五條三位藤原俊成

後白河法皇の勅を受けて藤原俊成撰す　二十卷

櫻花の、松はいよ〳〵翠に、花はいよ〳〵白いのは、またとない眺である。

若しこれを櫻の自然美といふならば、これが歴史美も亦一入の趣味をもつてゐる。「花は櫻木、人は武士」。櫻花は花中の花であつて、武士は人中の人である。昔から櫻花と武士とは其の因縁の甚だ深いものがある。勿來關外、馬上槊を横たへて紛々たる落花に逝く春を惜んだのは八幡公である。一度鎭西に赴かうとして淀より京に引返し、師の門を叩いて歌集を託し、その中、せめて一首を勅撰集に留めることが出來れば、たとひ死んでも生きてゐると同じであるといつたのは、平薩州である。俊成卿は感涙を流してこれを受納し、千載集を撰するに當つて、讀人不知





さゝなみや志賀の都はあれにしを昔ながらの山櫻かな

行宮　美作國院庄なる後醍醐天皇の行在所

一詩　天莫空勾踐、時非無范蠡。　備後三郎兒島高德

として彼の「さゝなみや」の絶唱を採錄したのである。深夜ひそかに行宮の櫻樹を削つて一詩を題し、人臣の至誠を雲上に奏して叡慮を安んじ奉つたのは備後三郎のである。若し夫れ吉野朝と櫻花との關係に至つては、千載の下、人をして、言ふべからざる感慨にその袖をしぼらせる。

（鈴木其一筆）

櫻花の季節は所謂春風駘蕩、寒からず暑からず、一年の好時節であ

百敷の大宮人は
いとまあれや櫻
かざして今日も
くらしつ
（新古今集山部赤人）

夜嵐や
園女の句

木の下に
芭蕉の句

年々歳々
年々歳々花相似、歳々年々人不レ同。
（唐の劉廷芝）

る。そこで我が國民は、上下を問はず、貧富を論ぜず、春服を纏ひ、芳醇を味はひ、嬉々として九十の春光に行樂を恣にするのである。

彼の「百敷の大宮人」は、奈良時代に於ける殿上人の櫻狩の有様で、春の日の長閑さ、眼の前に見る心地がする。「夜嵐や太閤樣の櫻狩」は、豪奢を極めた豐太閤の醍醐の花見を詠んだもので、木の下に汁も膾も櫻かなは、華美な元祿時代の花見を描いたものである。花神の寵眷を蒙る我が國民の如きは、世界に比類が少いであらう。言ふまでもなく、年々歳々花は相等しいけれども、これを見る者は年ごとにその齡を加へつゝあるのである。然るに一度此の花に對すれば、忽ちに新しみを感じて、老の將に至らんとするを知らないのは、誠に不可思議の事ではあるまいか。蓋し其の刹那美觀に打たれ靈感に觸れて、花や人、人や花、花と人とが渾然融合し去るが爲であるまいか。是に由つて之を觀れば、櫻花は我が民族の趣味精神の象徴である、東方君子國の精華である。古來櫻花が我が國民性を陶冶する上に偉大な力のあつたことは、之を想像するに難くないのである。



濱離宮
京橋區にある江戸時代からの名苑
東京灣に臨んでゐる

新宿御苑
四谷區にある廣い芝生の御苑
八重櫻が多い

觀櫻會御

觀光の爲外人の我が國に來る者は、花の季節が最も多い。而して彼等は畏くも觀櫻の御會に、濱離宮・新宿御苑などに御招待を蒙ることを以て無上の光榮と

してゐるのである。かくして彼等は純日本的趣味を心から感得するのである。

櫻花と我が國民性とを對照して見ると、驚く程の類似若しくは一致を見出すのである。櫻花は陽春三月に開いて、至つて陽氣である、世間的・樂天的である。梅の隱逸は之を此の花に認めることは出來ない。況して蓮の厭世をやである。我が國民性も亦然りである。由來我が國民は快活であつて、少しも厭世的傾向がなく、極めて世間的・樂天的である。これ其の一。櫻花の色は所謂櫻色であつて、淡紅であり、淡泊である、堇の濃紺もなく、ダリヤの深紅もない。我が國民性もまたその通りである。我が國民は古來淡泊を愛し、正直を重んじて、物に執着がなく、事に

Dahlia ダリヤ





凝滯がない。儒教が入り、佛教が入り、西洋文明が入つて、容易に我が文明に同化されたのも、一にこれが爲である。これ其の二。櫻花は密集して開くものであつて、極めて賑かである。之を眺めるには例へば吉野の一目千本といふやうに集團的なものがよい。唯一本の櫻、生花の櫻、盆栽の櫻はさまで人目を惹かない。全山皆櫻、滿堤悉く花であつて、始めて眞の櫻花美を窺ひ知ることが出來る。大和民族も亦然りである。もと家族制を以て立つた國だけあつて、國家的觀念が甚だ強く、國民的結合が極めて堅い。隨つて、よく一致團結して王の愾に敵する。これ其の三。我が國の櫻は、花はあるけれども實はない。全く無い譯ではないが、殆ど言ふに足らぬ。只其の花は壯美秀麗、はるかに百花に挺んでてゐる。されば之を理想的の花といつてよいと思ふ。

王の愾に敵する
諸侯敵二王所一レ愾而獻二其功一。（左傳）

我が國民、殊に武士は頗る之に似てゐる。其の純忠・勇敢・清廉・質素等の諸美德は、これ一定の主義・理想から導き出され、この主義を實行し、この理想を實現せんとして努力するものである。櫻花が大和魂の體現、武士道の象徴として武士の理想を寓する所となつたのは、全くこれが爲である。これ其の四。

最後に述ぶべきは、武士の精神に似通つた點のある事である。櫻花はたちまち開き、たちまち散る、開落共にあわたゞしい。一日見ることを怠ると、白雪滿地、しかも新綠すでに樹頭に上るのである。其の散りぎはは極めて美はしく、極めて淡泊で、微塵も未練がましい所がない。櫻花が武士の精神と融通する所のあるのは、一つにはこれが爲である。武士の生命とする所は犧牲的精神にある。名を惜んで命を惜まず、君の馬前に討死するを



櫻の詞

爲不二嶽一巍々
聳二千秋一。注爲二
大瀛水一洋々環二
八洲一。發爲二萬朶
櫻一衆芳難二與儔一。
凝爲二百錬鐵一、鋭
利可レ斷レ鍪。蓋
臣皆熊羆、武夫
盡好仇。

（藤田東湖）

賀茂眞淵

江戸時代國學四大人の一人。家を縣居と號す。遠江國濱松在生明和六年（一七六九）歿年七十三。

久方の
光の枕詞

科戸
風の神を科戸邊命といふ

そらみつ
日本の枕詞

以て無上の光榮とするのである。これを要するに、櫻花美と武士美とは二にして一、一にして二、神州正大の靈氣が凝つて此の花となり、此の人となつたものと謂ふべきであらう。

（倫理と國民道德）

## 二　櫻の詞

賀茂眞淵

かるがるしふに散る

かぞふ四つの時は行けれど、春にしく時なく、なべて十まり二つの月は立てれど彌生にくらぶる月もあらずなむありける。

かく〻年に稀なる彌生の空にして、久方の光うらゝに科戸の風なごき春の心よりなり出て、匂ひ榮ゆる櫻の花なむ、ちゞの花にすぐれにたるは、うべならずや。此の花はことさへ唐國には生ひずして、そらみつ日本の國のはたてに咲ける

そまことなりけれ。

おほよそ四方の國を四つの時にたとふるに、日本は天傳ふ日の最初の國にして、春によれゝば、よろづのもの皆みづ〳〵しく、人さいつ國にして、春によれゝば、よろづのもの皆みづ〳〵しく、人の心うらゝなり。唐國は久方の日の經の中つ國にして、夏にあたればちぢのわざこちたく、人の心はなはだしきなり。西の國は、かぎろひの日の入る國にして、秋になぞらふれば、くさ〳〵の

櫻　花　（阿部春峰筆）



筆蹟
もろこしの人に見せばやみよしのゝよし野の山のはなのさかりを　眞淵

足引の山の枕詞

事老いて、人の心よみにおよべるなり。

まかたの國の冬によれらんをも、なずらへてなむ知るべき。

これらの中に、唐人のめづてふ梅は、形の苦しく、桃は色のこちたきなり。日本の櫻にぞ、近く向ふに色あさらにして、名づくる詞

しもなく、足引の山々わたつみの崎々に滿ち咲ける時は、高き卑しき愛でぬくまもあらざりけれ。これぞこの名づけず、強ひず、天地のなしのまに〳〵治めたまひ、なごしまして、天つ日嗣の萬代にしらする皇大御世の姿を知りぬべきものなりける。

## 三　春の心

賀茂真淵

や唐土の人の心もて作れるまつろへごとには、梅のごとかぐはしきに似たる匂もあれど、こまやかに苦しげに、桃のごと深き色もありと見ゆれど、うたてこちたきに過ぎぬ。そが上に、こゝを撓めかしこを剪りつゝ、しひて直し教へんとすなれば、民の心たへずて遂に靜かなる世もあらず、他の國とすらなりはてにけり。

こを思ふに、春にしく時もなく、櫻にまさる花もなく、日本にぐらぶる國もなく、神の道に及ぶ道もなきものを、あまのます人天つ心のまにく、知らず覺えず心をやりつゝ、榮ゆる花のもとに、あそばへをるかも、歌ひをるかも。

（賀茂翁家集）

（賀茂眞淵全集――賀茂翁家集）

加藤宇萬伎
江戸の歌人
安永六年（一七七七）歿
年五十七

桔梗が原
長野縣東筑摩郡洗馬附近の原
武田信玄と小笠原長時とが合戰した處

小澤蘆庵
京都の歌人
享和元年（一八〇一）歿
年七十九

加藤千蔭
江戸の國學者
文化五年（一八〇八）歿
年七十四

春の心

小澤蘆庵

加藤宇萬伎

桔梗が原

小澤蘆庵

加藤千蔭

村田春海
江戸の國學者
文化八年（一八二一）
歿
年六十六

木下幸文
京都の歌人
文政五年（一八二二）
歿
年四十三

香川景樹
京都の歌人
天保十四年（一八四三）
歿
年七十四

加納諸平
和歌山の歌人
安政四年（一八五七）
歿
年五十二

中島廣足
熊本の國學者
元治元年（一八六四）
歿
年七十三

橘曙覽
福井の歌人
明治元年歿
年五十七

村田春海

中島廣足

加納諸平

橘曙覽

三月七日
後醍醐天皇元弘二年（一九二）
主上
後醍醐天皇
介錯
かしづき
東洞院
烏丸の東の通り
櫻井
大阪府攝津國三島郡島本村の字山崎驛の西方
八幡
石清水八幡宮

## 四　隱岐の御遷幸

明くれば三月七日、千葉介貞胤・小山五郎左衞門・佐々木佐渡判官入道道譽五百餘騎にて、路次を警固仕つて主上を隱岐國へ遷し奉る。供奉の人とては、一條頭大夫行房・六條少將忠顯・御介錯は三位殿御局ばかりなり。其の外はみな甲冑を鎧ひ、弓箭を帶せる武士ども、前後左右に打圍み奉りて七條を西へ、東洞院を下へ御車を軒れば、京中、貴賤男女小路に立並びて、正しき一天の主を、下として流し奉ることのあさましさよ。武家の運命今に盡きなん。と憚る所なくいふ聲巷に滿ちて、只赤子の母を慕ふ如く泣き悲しみければ聞くに哀を催して、警固の武士も諸共に皆鎧の袖をぞぬらしける。櫻井の宿を過ぎさせ給ひける時、八幡を伏

應化
佛の時に應じ本身を異體に變化して出現すること
湊川
今神戸市の內
福原
これも同じ
印南野
兵庫縣播磨國印南郡あたりの野
源氏の大將
源氏物語須磨の卷にある光源氏の事
明石の浦
ほのぼのとあかしの浦の朝霧に島隱れ行く舟をしぞ思ふ（古今集讀人不知）

拜み、御輿を舁据ゑさせて、二度帝都還幸の事をぞ御祈念ありける。八幡大菩薩と申すは、應神天皇の應化、百王鎭護の御誓あらたなれば、天子行在の外までも、定めて擁護の御眸をぞ廻らさるらんと、たのもしくこそ思し召しけれ。湊川を過ぎさせ給ふ時、福原の京を御覽ぜられて、平相國清盛が四海を掌に握つて、平安城を此の卑濕の地に遷したりしかば幾程もなく亡びしも偏に上を犯さんとせし驕の未だ果さずして、天の爲に罰せられしぞかしと思し召し慰む端となりにけり。印南野を末に御覽じて、須磨の浦を過ぎさせ給へば、昔源氏の大將の、此の浦に流され、三年の秋を送りしに、「波只こゝもとに立ちし心地して、涙落つとも覺えぬに、枕は浮くばかりになりにけり。」と、旅寢の秋を悲しみしも、理なりと思し召さる。明石の浦の朝霧に遠くなり行く淡路

杉坂　兵庫縣播磨國佐用郡江川村大畠より岡山縣美作國英田郡讃甘村に通ずる峠

中山峠ともいふ　久米の佐羅山　岡山縣美作國苫田郡（もと久米南條郡）にある津山市の西南郊

雞唱　雞聲茅店月、人跡板橋霜。（唐の温庭筠）

三尾　島根縣出雲國八束郡美保關村

寄せ來る浪も高砂の尾上の松に吹く嵐、跡に幾重の山川を杉坂越えて美作や、久米の佐羅山さらぬに、雲の山に雪見えて、遙かに遠き峯あり。御警固の武士を召して、山の名を御尋ねあるに、「是は伯耆の大山と申す山にて候」と申しければ、暫く御輿を停められ、内證深心の法施を奉らせ給ふ。或時は雞唱に茅店の月を抹過し、或時は馬蹄に板橋の霜を踏破して行路に日を窮めければ、都を御出あつて、十三日と申すに、出雲の三尾の湊に着かせ給ふ。こゝにて御船を艤して、渡海の順風をぞ待ち給ひける。

其の頃備前國に、兒島備後三郎高德といふ者あり。主上笠置に御座ありし時、味方に參じて義兵を擧げしが、事未だ成らざる先に笠置も落され、楠木も自害したりと聞えしかば、力を失つてもさ

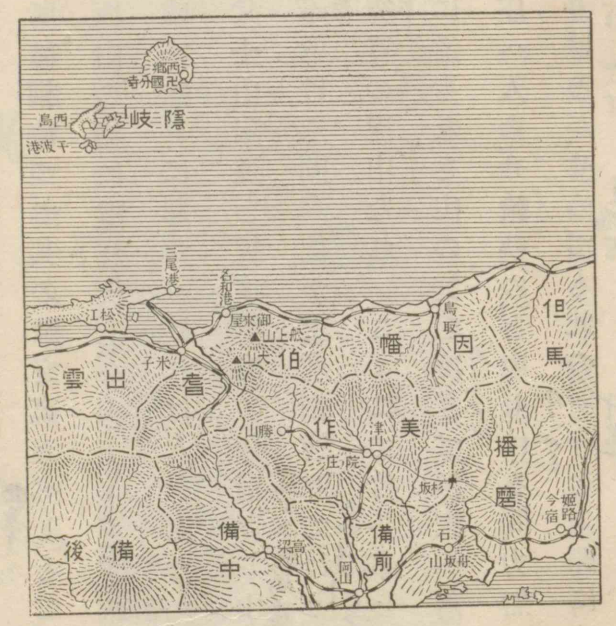




志士仁人　孔子の語　論語にある

衛懿公が　衛懿公之時、有臣曰弘演者、受命而使。未反而狄人攻衛：攻懿公於熒澤、殺之、盡食其肉、獨舍其肝。弘演至報使、於肝一辭畢、呼天而號。哀止曰、若臣者獨死可耳。於是遂自刳出腹實、內懿公之肝。乃死。……桓公聞之、復立衛於楚丘。（韓詩外傳）

見義不爲　孔子の語　論語にある




だしけるが、主上隱岐國へ遷されさせ給ふと聞きて、貳心なき一族どもを集めて評定しけるは、『志士仁人無求生以害仁、有殺身以成仁。』といへり。されば昔衛の懿公が、北狄の爲に殺されてありしを見て、其の臣に弘演といひし者これを見るに忍びず、自ら腹を搔切つて懿公が肝を己が胸の中に收めて、君の恩を死後に報いて失せたりき。『見義不爲無勇也。』いざや臨幸の路次に參り會ひ、君を奪ひ取り奉

船坂山　岡山縣備前國和氣郡三石村と兵庫縣播磨國赤穗郡船坂村との境にある山　三石峠ともいふ
今宿　兵庫縣播磨國飾磨郡高岡町姫路市の西方
三石　岡山縣備前國和氣郡三石村

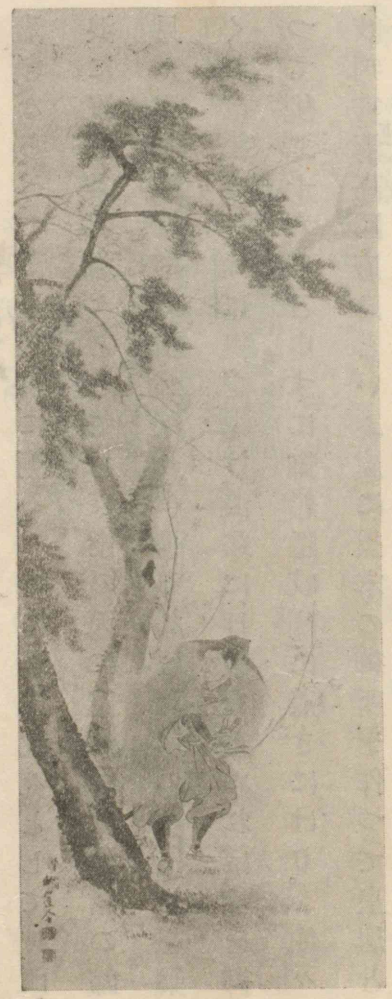
つて大軍を起し、縱令屍を戰場に曝すとも、名を子孫に傳へん」と申しければ、心ある一族ども皆此の議に同ず。「さらば路次の難所に相待つて其の隙を窺ふべし」とて、備前と播磨との境なる船坂山の嶺に隱れ伏し、今やく〜とぞ待ちたりける。

臨幸餘りに遲かりければ、人を走らかしてこれを見るに、警固の武士山陽道を經ず、播磨の今宿より山陰道にかゝり遷幸を成し奉りける間、高德が支度相違してけり。「さらば美作の杉坂こそ究竟の深山なれ。こゝにて待ち奉らん」とて、三石の山より直違に、道もなき山の雲を凌ぎて杉坂へ着きたりければ、「主上はや院庄へ入らせ給ひぬ」と申しける間、力無く、これよりちりく〜になりけるが、せめても此の所存を上聞に達せばやと思ひける間、微服潛行して時分を窺ひけれども、然るべき隙もなかりければ、君

勾踐　支那の周代の越の王　吳王夫差と戰つて會稽山に敗る　勾踐范蠡と謀り隱忍持久多年兵を練り民を治め遂に吳と戰つて之を滅す

の御座ある御宿の庭に大きなる櫻の木ありけるを押削つて、大文字に一句の詩をぞ書きつけたりける。

天莫空勾踐、時非無范蠡。


兒島高德（奥谷秋石筆）

御警固の武士ども朝にこれを見つけて「何事を如何なる者が書きたるやらん」とて、讀みかねて卽ち上聞に達してけり。主上は軈て詩の心を御悟りあつて、龍顏殊に御快く笑ませ給へども、武

士は敢へて其の來歷を知らず、思ひ咎むることも無かりけり。』

さる程に主上は出雲の三尾湊に十餘日御逗留あつて、順風になりにければ、船人纜を解いて御艤して、兵船三百餘艘前後左右に漕ぎならべて萬里の雲に溯る。時に滄海沈々として日西北の浪に沒し、雲山迢々として月東南の天に出づれば、漁船の歸る程見えて、一燈柳岸に幽かなり。暮るれば蘆岸の煙に船を繫ぎ、明くれば松江の風に帆を揚げ、浪路に日數を重ぬれば、都を御出あつて後二十六日に申すに御船隱岐國に着きにけり。佐々木隱岐判官清高國府島といふ處に黑木の御所を作つて皇居とす。玉扆に咫尺して召仕はれける人とては、六條少將忠顯頭大夫行房、女房には三位殿の御局ばかりなり。昔の玉樓金殿に引替へて、憂き節茂き竹椽淚隙なき松の墻、一夜を隔つる程も、堪忍ぶべき御心地ならず。雞人曉を唱へし聲、警固の武士の番を催す聲ばかり御枕の上に近ければ、夜の大殿に入らせ給ひても露微睡ませ給はず。萩の戸の明くるを待ちし朝政なけれども、曉毎の御勤、北辰の御拜も怠らず。今年いかなる年なれば百官罪なくして愁の涙を配所の月に濺ぎ、一人位を易へて宸襟を他鄉の風に惱ましし給ふらん。天地開闢よりこの方かゝる不思議を聞かず。されば天に懸る日月も誰が爲に明かなることを恥ぢざらん。心なき草木も之を悲しみ花さくことを忘れつべし。（太平記）

雞人曉を唱へし聲
雞人曉唱。聲驚二明王之眠一。（朗詠集都良香）
萩の戸
清涼殿に在る御室の名





## 五　千劍破城の軍

千劍破城の寄手は、前の勢八十萬騎に又赤坂の勢馳せ加つて百萬騎に餘りければ、城の四方二三里が間は見物相撲の場の如く

千劍破城
大阪府南河內郡千早村にあつた金剛山の西麓
寄手
大將は大佛高直時に後醍醐天皇元弘三年（一九九三）の春
赤坂
同郡赤坂村
千早の北四粁

## 第四十一章

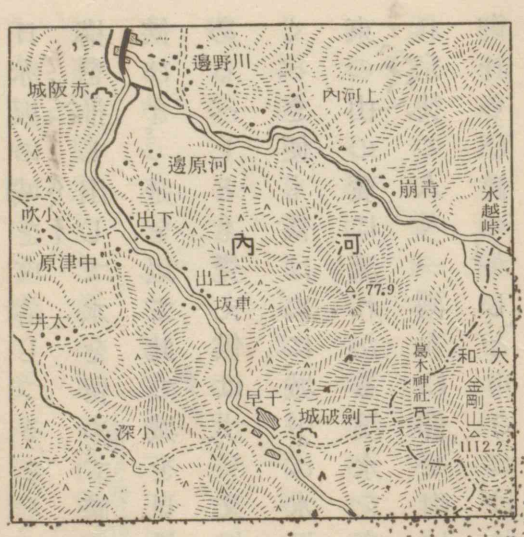
打圍んで、尺寸の地をも餘さず充ち滿ちたり。旌旗の風に飜つて靡く氣色は、秋の野の尾花が末よりも繁く、劍戟の日に映じて耀ける有樣は、曉の霜の枯草に布けるが如くなり。大軍の近づく處には山勢これが爲に動き、鬨の聲を震ふ中には坤軸須臾に摧けたり。

この勢にも恐れずして、僅かに千人に足らぬ小勢にて、誰を憑み何時を待つとしもなき城中にこらへて防ぎ戰ひける楠木が心の程こそ不敵なれ。此の城、東西は谷深く切れて人の上るべき樣もなし。南北は金剛山につゞきて而も峯峙ちたり。されども高さ二町許にて、周り一里に足らぬ小城なれば、何程の事かあるべきと寄手これを見侮つて、初め一兩日の程は向陣をも取らず、攻支度をも用意せず、我先にと城の木戸口の邊までかづきつ





れてぞ上りたりける。城中の者ども少しも騷がず靜まり返つて、高櫓の上より大石を投懸けて、楯の板を微塵に打碎いて漂ふ處を差詰め引詰め射ける間、四方の坂よりころび落ち、落ち重なつて、手を負ひ、死を致す者、一日が中に五六千人に及べり。長崎四郎左衞門尉軍奉行にてありければ、手負・死人の實檢をしけるに、執筆十二人夜晝三日が間筆をも置かず注せり。さてこそ「今より後は、大將の御許しなくして合戰したらんずる輩をば、却て罪科に行はるべし」と觸れられけれ




千劍破城附近

長崎高資

金澤貞將
大佛陸奥守貞直
兩大將
大佛高直
長崎高資

ば、軍勢暫く軍を止めて、先づ己が陣々をぞ構へける。

こゝに赤坂の大將金澤右馬助、大佛奥州に向つて宣ひけるは、「前日赤坂の城を攻落しつること、全く士卒の高名に非ず。城中の構を推し出して水を留めて候ひしに依つて、敵程なく降參仕り候ひき。是を以て此の城を見候に、是程僅かなる山の巓に用水あるべしとも覺え候はず。又揚げ水なんどをよその山より懸くべき便も候はぬに、城中に水澤山に有りげに見ゆるは、如何樣東の山の麓に流れたる溪水を夜々に汲むかと覺えて候。あはれ、宗徒の人々一兩人に仰せ附けられて、この水を汲ませぬ樣に御計らひ候へかし。」と申されければ、兩大將「此の儀然るべしと覺え候。」とて、名越越前守を大將として、その勢三千餘騎をさし分けて水の邊に陣を取らせ、城より人おりくだりぬべき道々に逆茂





木を引きてぞ待懸けゝる。

楠木は元來勇氣・智謀相兼ねたる者なりければ、此の城を拵へける初め、用水の便を見るに、五所の祕水とて、峯通る山伏の祕して汲む水この峯にあつて、滴ること一夜に五斛ばかりなり、この水いかなる旱にもひる事なければ、形の如く人の口中を濡さんことと相違あるまじけれども、合戰の最中は或は火矢を消さん爲、又喉の乾くこと繁ければ、此の水ばかりにては不足なるべしとて、大きなる木を以て水船を二三百打たせて水を湛へ置きたり。

又數百箇所作り並べたる役所の軒に繼樋を懸けて、雨降れば雷を少しも餘さず船に受入れ、船の底に赤土を沈めて、水の性を損ぜぬやうにぞ拵へける。この水を以て、縱ひ五六十日雨降らずともこらへつべし。其の中に又などかは雨降ること無からんと、

料簡したる智慮の程こそ浅からね。

されば城よりは強ちに此の溪水を汲まんともせざりけるを、水防ぎける兵ども夜ごとに機をつめて、今やと待懸けゝるが、初めの程こそあれ、後には次第々々に心懈り、機緩みて、此の水を汲まざりけるぞ。」とて、用心の體少し無沙汰にぞなりにける。

楠木これを見すまして、究竟の射手を揃へて、二三百人夜に紛れて城よりおろし、まだ東雲の明けはてぬ霞隠れより押寄せ、水邊に詰めて居たる者ども二十餘人斬伏せて、透間もなく斬つて懸りける間、名越越前守悐へかねて、本の陣へぞ引かれける。寄手數萬の軍勢これを見て、渡り合はせんとひしめけども、谷を隔て尾を隔てたる道なれば、輒く馳せあはする兵もなし。とかくしける其の間に、捨置きたる旗・大幕なんど取持たせて、楠木が勢徐





かに城中へぞ引き入りける。其の翌日、城の追手に三本唐笠の紋書きたる旗と同じき紋の幕とを引いて、「これこそ名越殿より賜はつて候ひつる御旗にて候へ。御紋附いて候間、他人の爲には無用に候。御内の人々これへ御入り候ひて召されて候へかし。」といつて、同音にどつと笑ひければ、天下の武士どもこれを見て、「あはれ名越殿の不覺哉。」と、口々にいはぬ者こそ無かりけれ。

三本唐笠の紋

名越一家の人々、此の事を聞いて安からぬ事に思はれければ、當手の軍勢ども一人も残らず城の木戸を枕にして討死をせよ。とぞ下知せられける。これに依つてかの手の兵五千餘人思ひ切つて、討てども射れども用ひず、乗越え〳〵城の逆茂木一重引破

つて、切岸の下までぞ攻めたりける。されども、岸高うして切立つたれば、やたけに思へども登り得ず、只徒に城を睨み忿を抑へて息つき居たり。此の時城の中より、切岸の上に横たへ置きたる大木十ばかり切つて落し懸けたりける間、將棊倒しをするが如く、寄手四五百人壓しに討たれて死しにけり。これにちがはんとしどろになつて騒ぐ處を、十方の櫓より差落し、思ふ様に射ける間、五千餘人の兵ども残少に討たれて、其の日の軍は果てにけり。誠に志の程は猛けれども、只仕出でたる事もなくて若干討たれにければ、「あはれ恥の上の損かな」と、諸人の口遊は猶止まず。世の常ならぬ合戰の體を見て、寄手も侮り憎くや思ひけん、今は初めの様に勇み進んで攻めんとする者もなかりけり。長崎四郎左衛門尉此の有様を見て、「此の城を力攻にする事は人



を討たるゝばかりにて、其の功成り難し。唯取卷いて食攻にせよ」と下知して、軍を止められければ、徒然に皆堪へ兼ねて、花の下の連歌師どもを呼下し、一萬句の連歌をぞ始めたりける。其の初日の發句をば長崎九郎左衛門尉師宗、

さきがけてかつ色みせよ山櫻

とし、脇の句に工藤二郎左衛門尉、

嵐や花のかたきなるらん

とぞ附けたりける。誠に兩句ともに詞の緣巧にして、句の體は優なれども、味方をば花になし、敵を嵐に喩へけるは、禁忌なりける表示かなと、後にぞ思ひ知られける。大將の下知に隨つて軍勢皆軍を止めければ、慰む方や無かりけん、或は碁・雙六を打つて日を過し、或は百服茶褒貶の歌合なんどを翫んで夜を明かす。

花の下　連歌に秀でたるものゝ稱

百服茶　茶會の一種。本の茶非の茶を分ち種々の茶を煎じて百服に至るもの

これにぞ城中の兵はなか〳〵惱まされたる心地して、遣る方も無かりける。

少し程經て後、正成「いでさらば又寄手をたばかりて居眠さまさん」とて、藁を以て人長に人形を二三十作つて、甲冑を着せ、兵仗を持たせて、夜中に城の麓に立て置き、前へ疊楯をつき並べ、其の後にすぐりたる兵卒百人を交へて、夜のほの〴〵と明けゝる霧の下より、同時に鬨をどつとつくる。四方の寄手鬨の聲を聞いて、「すはや城の中より打出でたるは。今こそ敵の運の盡くる所の死狂ひよ」とて、我先にとぞ攻合はせける。城の兵は豫て巧みたる事なれば、矢軍ちとする樣にして、大勢相近づけば、人形ばかりを木隱れに殘し置いて、兵は皆次第々々に城の下に引きのぼる。寄手、人形を實の兵ぞと心得て、これを擊たんとあひ集る。正成

疊楯　のべたゝみの自在な楯



所存のごとく敵をたばかり寄せて、大石を四五十、一度にばつとはつす。一つ所に集つたる敵三百餘人、矢庭に打殺され、半死半生の者五百餘人に及べり。軍果てゝこれを見ればあつぱれ大剛の者かなと覺えて一足も引かざりつる兵、皆人にはあらで、藁にて作れる人形なり。これを討たんと相集つて、石に打たれ矢に當つて死せるも高名ならず、又これを危みて進み得ざりつるも、臆病の程顯れていふ甲斐なし。唯とにもかくにも萬人の物笑とぞなりにける。これより後は愈〻合戰を止めける間、諸國の軍勢只徒に城をまもり上げて居たるばかりにて、するわざ一つも無かりけり。こゝに如何なる者か詠みたりけん、一首の古歌を飜案して、大將の前にぞ立てたりける。

古歌
よそにのみ見てやみなん葛城や高間の山の峯の白雲
（新古今集）

飜案
その心迫をかつて

同じき三月四日、關東より飛脚到來して、「軍を止めて徒に日を送ること然るべからず。」と下知せられければ、宗徒の大將たち評定あつて、味方の向陣と敵の城との間に高く切立てたる堀に橋を渡して、城へ討入らんとぞ巧まれける。これが爲に京都より番匠を五百餘人召下し、五六八九寸の材木を集めて、廣さ一丈五尺、長さ二十丈餘りに梯をぞ作らせける。梯既に作り出しければ、大綱を二三千筋つけて、車を以て卷立て、城の切岸の上へぞ倒し懸けたりける。魯般が雲の梯もかくやと覺えて巧なり。やがてはやりをの兵ども五六千人、橋の上を渡り、我先にと進んだり。あはや此の城只今打落されぬと見えたる處に、楠木豫て用意やしたりけん、投松明の先に火をつけて、橋の上に薪を積めるが如くに投集めて、水彈きを以て油を瀧の流るゝやうにかけたる間、

魯般が雲の梯
「楚欲レ攻レ宋：：墨子曰、臣見ニ大王之必傷レ義而不レ得レ宋。王曰、公輸天下之巧士、作ニ雲梯之械一設以攻レ宋、曷爲弗レ取。」（淮南子）
公輸は魯般の號



火橋桁に燃えついて、溪風焰を吹きしいたり。なまじひに渡り懸りたる兵ども前に進まんとすれば、猛火盛に燃えて身を焦す、歸らんとすれば、後陣の大勢前の難儀をも言はず支へたり。そばへ飛下りんとすれば、深く巖聳えて肝を冷し、如何せんと身を揉うで押合ふ程に、橋桁中より燃え折れて、谷底へどうと落ちければ、數千の兵、同時に猛火の中へ落重なつて一人も殘らず燒け死にけり。其の有樣、偏に八大地獄の罪人の刀山劍樹に貫かれ、猛火鐵湯に身を焦すらんも、かくやと思ひ知られたり。

八大地獄
等活地獄
黑繩地獄
衆合地獄
叫喚地獄
大叫喚地獄
焦熱地獄
大焦熱地獄
無間地獄

さる程に吉野・十津川・宇陀・宇智郡の野武士ども、大塔宮の命を含んで相集ること七千餘人、こゝの峯かしこの谷に立隱れて、千劍破の寄手どもの路を差塞ぐ。これに依つて諸國の兵の兵粮忽ちに盡きて、人馬共に疲れければ轉漕に惱へかねて、百騎二百騎

十津川
奈良縣吉野郡の南方山地
十津川の流域
宇陀
奈良縣宇陀郡
大和國の東部
宇智郡
大和國の西部で吉野川の兩岸に跨る

藤岡作太郎
國文學者
東京帝國大學文科大學助教授
文學博士
石川縣金澤市生
明治四十三年歿
年四十一

本誓寺
東京市深川區仲大工町にある
淨土宗
京都知恩院の末寺

羅漢
梵語阿羅漢の略
Arhan
小乘の悟を得た者

引いて歸る處を案内者の野武士ども處々のつまり〳〵に待ちうけて討留めける間、日々夜々に討たるゝもの數を知らず。稀有にして命ばかりを助る者は、馬物具を捨て、衣裳を剝取られて裸なれば、或は破れたる蓑を身に纏ひて膚ばかりを隱し、或は草の葉を腰に卷いて恥をあらはせる落人ども、毎日引きも切らず十方に逃散る。前代未聞の恥辱なり。されば日本國の武士どもの重代したる物具・太刀・刀は、皆此の時に至つて失せにけり。軍勢ども親討たるれば子は髻を切つてうせ、主疵を被れば郎從助けて引きかへす間、始は八十萬騎と聞えしかども今は纔かに十萬餘騎になりにけり。（太平記）

## 六　愛兒の記念

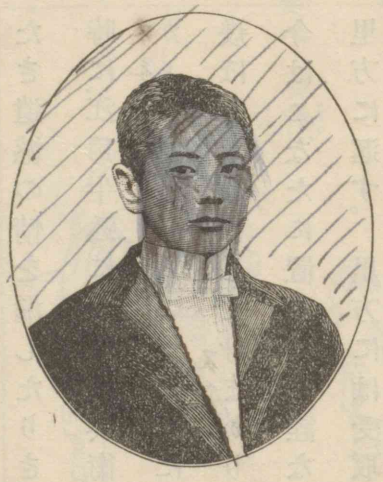
藤岡作太郎



菊池容齋
畫家で最も歷史畫に長じてゐた
名は武保
江戸生
明治十一年歿
年九十一

平出君
國文學者
平出鏗次郎
文部編修
愛知縣名古屋市
明治四十三
年四十三

前賢故實
二十卷
菊池容齋畫
可美眞手命より細川頼之に至るまで數百人の像を畫いたもの
今上陛下
明治天皇



早くも三四年を過ぎぬ、深川の本誓寺に詣でて五百羅漢の畫幅を見たる事ありき。菊池容齋の經營慘澹たる筆に成れる大作にて、春秋の彼岸にはこれを懸列ねて供養し、普く有緣の參拜を許す由なれば、友人平出君を誘ひて歩を運びしなり。

容齋が揮毫の因緣については、あはれなる物語あり。今日廣く世に行はるゝ「前賢故實」は、この歷史畫家が畢生の心血を絞りて描き成し、以て風教を補はんとしたるもの、辱くも今上陛下が日本畫士の號を賜ひしもこれが爲なるべく、また和氣清麿に神號を追贈あらせられしも、或はこの書がその動機となりしな

福田行誠
浄土宗の高僧
東京芝増上寺に住し後深川本誓寺に隠居した後また推されて京都知恩院主となつた
明治二十一年寂年八十三

るべしとも傳ふ。されど、初めはこの十年苦心の作も發行する書肆なく、上梓する資財なく、久しく、筐底に祕めて徒に紙魚のすみかとなるを待つばかりなりしかば、福田行誠に向ひて堪へがたき遺憾の情を漏したりき。

時に、江戸牛込に加藤金兵衛といふ商人ありき。手の中の珠とかしづきし一人の女、年頃にもなりしかば、或方に嫁入らせしに、幾ほどもなくして身まかりぬ。「婚禮のをり持參せる衣服、調度、今はこなたに置きても詮なし、たゞ歎きの種ぞ。」とて、婿の方より里方に返す。里方には受取らず、「一旦遣はしゝ女の道具は卽ちそなたのもの、それを返さるゝは死したるものを離緣するやうにて、草葉の蔭にもいかばかり悲しからん。これはそなたへ。」「いやこなたへ。」と押問答の果、金兵衛は腕拱きて、「さらば吾に思案





あり、今深川におはする行誠上人は浄土宗の大德、古今の名僧と聞くに、この聖に託しまゐらせなば、衆生濟度の便ともしたまひて、亡き女が往生の緣ともなりぬべし。」といふに、乃ち相談は決し、かの調度を賣代なし、なほ首尾をあはせて一千兩の金を行誠に捧ぐ。さてこそ行誠は、容齋を招きて、喜ばれよ、御身の志は成りぬ。印刷の料は調へ得たり。」とあるに、容齋は涙ぐむまで嬉しく、有りがたく、脫稿の後凡そ二十年にして、こゝに「前賢故實」の出版に取りかゝりしなりけれ。容齋は「年來の宿望は今しも遂げたるに、い

小子部螺嬴（前賢故實）

かにしてかこの大恩に報ゆべき。とたづぬるに、行誠は善いかな。さらば五百應眞の圖を畫きて供養し給はゞ、亡者の爲、施主の爲、いかばかりなる功德ならん。御身の滿足より延いては世間の滿足も偏に世を早うせし少女の爲、それを悲しむ父母の爲なる名を萬世に朽ちせぬばかりに。」と、沐浴齋戒して書きあげたるが、この本誓寺の什物なりとかや。

吾等が參詣せし折も、くさ〳〵の供物を捧げたるが中に、小兒の玩具の珍しく面白きを取集めたるがあり。これも近頃愛兒を喪ひし人の、その遺物をこゝに納めしなりとの事なりしが、一わたりあはれと見たるばかりにて、さしも心にも留らず、畫幅の由緒も一わたり聞きたるまでにて、容齋の筆法はとあり、思想はか





かりなど思ふまゝの事を言散らして、さて過ぎにき。

今思へば淺はかなりし事かな。昨日は人の身の上、今日は我が身など古めかしき言草ながら、今こそひし〳〵と心の底に染みぬれ。吾も一昨年の夏長女を失ひぬ。長女、名は光、時に七歳笑ひさゞめき戯れしものゝ、はかなき病に忽然とこの世を去るべしとは誰か思はん。わが身は既に四十に近し、この後爲すべき事の奥も測り知られたり。唯わが子のみぞわが誇、わが望なりしを、一朝にして死の手に奪ひ去らるゝこと、あらばあらるゝことか、とかくても過さば過さるゝことか。ある時はありのすさびにあはれさは知りぬる。よくもあるかなとは、さてありぬべし。固き蕾に過してしなくてぞまことのあはれさは知りぬる。よくもあるかなとは、さてありぬべし。しくも咲出でたる花の、手折らるゝの人の目にとまるともなくて、不意の嵐にもぎ取られし恨はい

かばかりぞや。年たけて少しにても世にあるかひの務をなしたらば知らず、やう〳〵物のあやめも覺ゆる程に、早くももとの闇路に歸りなばかゝるものゝありしと知るは家の内の人ばかり。世にも知られで空しく來り、また往く、いかに悲しきことぞ。愚なる親はせめても亡き兒の、わが心に、又人の心に忘れずばそれをしもなほ生きたりと喜ばん。固よりわが家の生涯忘るべき筈もなし。唯忘れじとにはあらず、幼き罪なき兒は樣々の教訓をその親、その祖母に遺したり。もし吾等の將來に得る所あらば、そは卽ちわが兒の賜ともいつきてん。さりとても現なの心や。過去りし面影と殘しゆきしこの教とを身にしめて未だ足らず。願はくは忘れんとするわが友の一人にても、我が兒を思ひ出でんことを。知らで止みなん世の人の一人にて





みどり兒
鶴松

愛妃
弘徽殿の女御低子

もかゝるものもありしよと愍まんことを。これのみぞ亡き後の我が望なりける。

豐太閤が朝鮮征伐を思ひ立ちしは老いての後、やう〳〵儲けたりしみどり兒に死なれて鬱悶やる方なく、いかにしてか其の悲しみを忘れんとてなりと傳ふることのあるを、歴史家は「そは英雄の心事を解せず、着々として歩を進めたる經營に心づかざる僻事なり」といはん。されど、凡人にもせよ、英雄にもせよ、人の情は同じきものなり。當時の秀吉が胸の中を思ひやりては是非は知らず、傳ふる事の亦所以ありと思はざるを得ず。花山天皇は愛妃を先だてし御悲しみに堪へ給はざりしその機に乘じて、藤原道兼がそゝのかしまゐらせしかば、則ち宮中を遁れ出でて出家せさせたまひき。後にぞ道兼が欺けるなりと知りて悔しく

思し召しけると、古史には記したるが、果して法皇は悔み給ひけんや。

かれ佞臣が欺けるなりとは知りつゝも、それも得菩提の善知識亡き人のためにはよくこそ朕を誘ひけれと、逃去る道兼を見送りて、滿足して御髪は下したまひけんかし。

例を引き奉るにはあらねど、わが身に思ひしむにつけて、あらためて昔の跡を顧みるなり。健かなる者は日々の務に勵みて其の悲しみを忘るべし。悟ある者はせん方なき世の習と、術無き思に沈まざるべし。あはれ身も心も弱き者の奮ひ立ちて働き疲るゝ事もえせず、さりとて一筋に思ひ諦むることもならず、つくづくと日毎に同じ歎を繰返すかな。

永祿四年毛利元就の嫡子大膳大夫隆元頓死す。家臣等、父母の愁傷いかばかり甚だしかるべきと、心配一方ならざりしに、案の

永祿四年
正親天皇の御世
（一三三一）
謙信信玄と川中島に戰つた年





外元就は悲痛の色なく、其の子吉川元春・小早川隆景及び家臣等を呼びて「隆元の死亡は偏に尼子滅亡の基なり。わが子の弔合戰と思ひて皆々心を一つにして向はゞ、強敵もいかでか挫かざるべき。勝利は掌の中なり。隆元のためぞ、位牌の見てあるぞ。」と勢込んで言ひしかば、上下愁眉を開いて勇み立つ。「これをしほに進めや。」とて、元就自ら三軍を率ゐて、やがて白鹿の城を拔きたりといふ。論ずる者は言ふまでも無く、これ兵氣の沮喪するを憂へて人心を鼓舞せしなりといふめれど、それのみにては物足らず、天折せし愛子を悼みて、一勝一功も其の手に成りしと知らせばやとの親心ならじやは。

勇ましき世の事は思ひもよらず、吾にはかなき筆あるのみ。南海の任に下りし時伴なひし人の、歸り上る時は一人足らずと

白鹿
島根縣出雲國島根郡法吉村の白髮山に在つた尼子氏の城
天子の軍と大軍
一軍が一日に三十里
三軍
大軍
一人足らず
都へと思ふものゝかなしきはかへらぬ人のあればなりけり
（紀貫之）

日記
土佐日記

岡本綺堂
戯曲家
名は敬二
明治五年東京生

歎きて書きし貫之朝臣の日記に思ひ比べんには、似も似ぬすさびながら、千年の前後に通ひめぐる人の心ばかりは同じかりけり。されど我が日記は同じ事を繰返し〳〵て、人に示す程のものならず、何をがな世に公にして愛兒の記念とせんと思ひなりぬるも、筆執ることさへものうくて、はか〴〵しくも心定めず。かくて思ひ立ちぬるより三年を閲して、やう〳〵に稿を了へたるが、この文學史なり。誇らはしく世に示さんこと江湖に對して、また亡兒に對して、恥づかしくは思へど、今はたすべなし。同じ心にあはれと見る人あらば、わが望は足りなん。（國文學史講話）

## 七　夜叉王

元久元年七月十八日

岡本綺堂





登場人物
面作師夜叉王
夜叉王の娘桂
同　楓
源左金吾頼家
修禪寺の僧

元久元年七月十八日
土御門天皇の御世（一八六四）
この日頼家は北條時政の手で弑せられた
年二十三
修善寺村
今の田方郡修善寺村
建仁三年（一八六三）八月源頼家母政子の爲にこゝに幽せられた

伊豆の國狩野の莊、修善寺村、桂川の畔、夜叉王住家。

藁葺の古びたる二重家體。破れたる壁に舞樂の面など懸け、正面に紺暖簾の出入口あり。下手に爐を切りて、素燒の土瓶など掛けたり。庭の入口は竹にて編みたる門、外には柳の大樹、其の後は畠を隔てゝ、塔の峯つゞきの山又は丘など見ゆ。

二重の上手に續ける一間の家體は細工場にて、三方に古ぶたる蒲簾を下せり。庭前には秋草の花咲きたり。

楓門に立ちて人を見送る體。そこに修禪寺の僧一人、燈籠を持ちて先に立ち、續いて源頼家卿（二十三歳）跡より下田五郎景安（十七八歳）頼家の太刀を捧げて出づ。

僧　これ〳〵、將軍家の御微行ぢや、疎相があつてはなりませんぞ。

楓　はつと平伏す。頼家主從進み入る。夜叉王出で迎へて、

夜叉　思ひも寄らぬお成とて、何の設もござりませぬが、先づあれへお通り下されませ。

賴家は緣に腰を掛く。

夜叉　して、御用の趣は。

賴家　問はずとも大方は察して居らう。我が面體を後の形見に遣さんと、曩に其の方を召出し、賴家に似せたる面を作れと、繪姿までも遣はして置いたるに、日を經れども出來せず。幾度か延引を申立てゝ今まで打過ぎしは何たる事ぢや。

五郎　たかゞ面一箇の細工、如何に丹精を凝らすとも百日とは費すまい。お細工仰せつけられしは當春の初め、其の後已に半年をも過ぎたるに、未だ獻上いたさぬとは餘りの懈怠、最早猶豫は相成らぬと、上樣の御機嫌散々ぢやぞ。



賴家の性格を表する。

賴家　予は生まれ附いての性急ぢや。何時まで待てど暮らせど埒明かず。餘りに齒痒う覺ゆるまゝ、此の上は使など遣はすこと無用と、予が直々に催促に參つた。おのれ何故に細工を怠り居るか。子細をいへ、子細を申せ。

夜叉　御立腹恐入りましてござりまする。勿體なくも征夷大將軍、源氏の棟梁のお姿を刻めとあるは、職の名譽、身の面目、いかでか等閑に存じませうや。御用承りて已に半年、未熟ながらも腕限り根限りに、夜晝となく打ちましても、意に適ふ程のもの一箇もなく、更に打替へ作り替へて、心ならずも延引に延引を重ねましたる次第、何とぞお察し下さりませ。

賴家　えゝ、催促の都度に同じ事を……其の申譯は聞飽いたぞ。

五郎　此の上は唯延引とのみでは相濟むまい。何時の頃までに

夜叉　梵語 Yaksa 捷疾鬼と譯す
羅刹　梵語 Rāksasa 惡鬼と譯す
三島神社　靜岡縣伊豆國田方郡三島町にある官幣大社
修善寺から北二十粁

は必ず出來するか、豫め期日を定めてお詫を申せ。

夜叉　其の期日は中上げられませぬ。左に鑿を持ち、右に槌を持てば、面は容易く成るものと思し召すか。家を作り塔を組む番匠なんどとは事變りて、これは生無き粗木を削り、男・女・天人・夜叉・羅刹ありとあらゆる善惡邪正の魂魄を打込む面作師。五體に漲る精力が兩の腕に自ら湊る時、我が魂魄は流るゝ如く、彼に通ひて始めて面も作られまする。但し其の時は半月の後か、一月の後か、或は一年二年の後か、我ながら確とはわかりませぬ。

僧　これ〳〵夜叉王殿。上樣は御自身も仰せらるゝ如く至つて御性急でおはしますぞ。三島神社の放し鰻を見るやうに、ぬらりくらりと取止の無い事申上げたら御癖が愈〻募らう



程に、こなたも職人冥利、何日の頃までと日を限つて、確と御返事を申すがよからう。

夜叉　ぢやというて出來ぬものはのう。

僧　何の、こなたの腕で出來ぬ事があらう。面作師も多くある中で、伊豆の夜叉王といへば、京・鎌倉までも聞えた者ぢやに……

夜叉　さあ、それ故に出來ぬといふのぢや。わしも伊豆の夜叉王といへば、人にも少しは知られた者、たとひお咎め受けうとも、己が心に染まぬ細工を世に遺すのは、如何にも無念ぢや。

頼家　何、無念ぢやと……。さらば如何なる祟を受けうとも、早急には出來ぬといふか。

夜叉　恐れながら早急には……

頼家　んう、おのれ覺悟せい。

疳癖募れる賴家は、五郎の捧げたる太刀を引取つて、あはや拔かんとす。奥より桂走り出で、

桂　まあ〳〵お待ち下さりませ。

賴家　えゝ、退け〳〵。

桂　先づお鎭まり下さりませ。面は唯今獻上いたしまする。のう父樣。

と顧みれども、夜叉王は默して答へず。

五郎　何、面は既に出來して居るか。

賴家　えゝおのれ、前後不揃の事を申立てゝ予を欺かうでな。

桂　いえ〳〵、嘘いつはりではござりませぬ。面は確に出來して居りまする。これ父樣、もう此の上は是非がござんすまい。

楓　ほんにさうぢや。昨夜漸く出來したといふ彼の面を、いつそ獻上なされては……





僧　それがよい、〳〵。こなたも凡夫ぢや。名も惜しからうが、命も惜しからう。出來した面があるならば、早う上樣に差上げて、お慈悲を願ふが上分別ぢやぞ。

夜叉　命が惜しいか、名が惜しいか。こなた衆の知つた事でない。默つておゐやれ。

僧　さりとて、これが見てゐられうか。さあ娘御、其の面を持つて來て、ともかくも御覽に入れたがよいぞ。早う、〳〵。

楓　あい〳〵。

細工場へ走り入りて、木彫の假面を入れたる箱を持出づ。桂受取りて賴家の前に捧ぐ。賴家無言にて心少しく解けたる體なり。

桂　僞ならぬ證據、これ御覽下さりませ。

　　賴家假面を取りて打眺め、思はず感歎の聲を揚げる。

賴家　おゝ見事ぢや。好う打つたぞ。

五郎　上樣おん顏に生寫しぢや。

賴家　んう。

　　と飽かず打ちまもる。

僧　されぱこそいはぬ事か。これ程の物が出來してゐながら、とかう澁つて居られたは、夜叉王殿も氣の知れぬ男ぢや。はゝゝ。

　　夜叉王容を改める。

夜叉　何分にも我が心に適はぬ細工。人には見せじと存じましたが、かう相成つては致方もござりませぬ。方々には其の面





を何と御覽なされまする。

賴家　さすがは夜叉王、あつぱれのものぢや。賴家も滿足したぞ。

夜叉　あつぱれとの御賞美は憚ながらおめがねちがひ。それは夜叉王が一生の不出來。よう御覽じませ。面は死んで居りまする。

五郎　面が死んで居るとは……

夜叉　年來數多打つたる面は生けるが如しと人もいひ、我も許して居りましたが、不思議や、此の度の面に限つて、幾度打直しても生きたる色無く、魂も無き死人の相……それは世にある人の面ではござりませぬ。死人の面でござりまする。

五郎　そちはさやうに申しても、我等の眼にはやはり生きたる人の面……死人の相とは相見えぬがのう。

夜叉　いや〳〵、どう見直しても生ある人ではござりませぬ。而も眼に恨を宿し、何者かを呪ふが如き怨靈・怪異なんどの類：

僧　あ、これ〳〵、其のやうな不吉な事は申さぬものぢや。御意に適へば、それで重畳。有難くお禮を申されい。

頼家　んう、とにもかくにも、此の面は頼家の意に適うた。持歸るぞ。

夜叉　たつて御所望とござりますれば……

頼家　おゝ所望ぢや。それ。

頤にて示せば、桂は心得て假面を箱に納め、頼家に捧ぐ。頼家立つ、五郎も立つ。桂庭におり立つ。

僧　やれ〳〵、これで愚僧も先づ安堵いたした。夜叉王殿、明日又逢ひませうぞ。





頼家行きかゝりて物に躓く。

頼家　おゝ、何時の間にか暗うなつた。

僧は進み出でて桂に燈籠を渡す。桂は假面の箱を僧に渡し、燈籠を持ちて出づ。夜叉王はじつと思案の體なり。

楓　父様、お見送を……

夜叉王始めて心附きたる如く、楓と共に門口に送り出づ。

五郎　そちへの御褒美は改めて沙汰するぞ。

頼家等相前後して出行く。夜叉王起ち上つて暫時默然として、壁に懸けたる種々の假面を取下し、あはや打碎かんとす。楓は驚きて取縋る。

楓　あゝこれ、何となさる。お前は物に狂はれたか。

夜叉　せつば詰りて是非に及ばず、拙き細工を獻上したは悔んで

夜叉王　左甚五郎作

も返らぬ我が不運。あのやうな面が將軍家の御手に渡つて、これぞ伊豆の住人夜叉王が作と寶物帳にも記されて、百千年の後までも笑を遺さば、一生の名折れ、末代の恥辱。所詮夜叉王の名は廢つた。職人も今日限り。再び槌は持つまいぞ。

（劇）

楓　さりとは短氣でござりませう。如何なる名人・上手でも細工の出來不出來は時の運。一生の中に一度でもあつぱれ





富士谷御杖　江戸時代の歌學者　名は成壽又は成元　京都に住す　文政六年（一八二三）歿　年五十六

大雅堂　江戸時代の文人畫家　池野無名　九霞山樵　京都の人　祇園南海柳澤洪園等に學ぶ　安永五年（一七七六）歿年五十四

安永檢校　京都の人

名作が出來ようならば、それが卽ち名人ではござりませぬか。

夜叉　んう。

楓　拙い細工を世に出したが、さ程無念と思し召さば、これから愈〻精出して、世をも人をも駭かす程の立派な面を作り出し、恥を雪いで下さりませ。

楓は縋りて泣く。夜叉王答へず、思案の眼を瞑ぢてゐる。

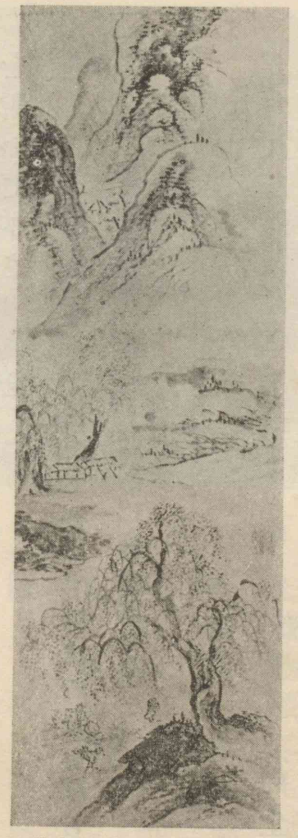
日暮れて笛の音遠く聞ゆ。（綺堂戲曲集）

## 八、ものゝ上手

富士谷御杖

大雅堂といひし人、近頃書畫をもて鳴れり。若かりし時、三絃を好めるあまり、その頃の妙手なりし安永檢校といふ瞽者の近隣にわざと居して、日々に人々に教ふるを聞きて、心をやられき。

或時、安永が家にいたりて、かく殊更に近隣に卜居したるよしを告げて、一曲を望む。安永その志のねもごろなるを感じて、やがて傍にありし三絃をさぐりとりて、彈きて聞かせき。しかるにその三絃裏皮破れたりければ、いとふくつけゝれど、おのれ一期の思出に、いま一曲をと乞ひけるに、安永、心よからぬ面持して、「そこは何を業とし給ふぞ」と問ふ。大雅答へて、「繪をかき侍る」といふ。安永のいへらく、「さは、そこは繪はいと拙かるべし」といふに、大雅思へらく、「一道に達しぬれば、よろづのいたりも深きな



垂柳山水（池野大雅堂）





らひなれど、これは瞽者なるを、いかでか繪事は知るべき」と、なまかたはらいたけれど、「いかなればおのれ繪の拙きを知り給ふぞ」といふに、安永笑ひて、「いま裏皮破れたる三絃にてひきたるを飽かずおぼす」その聽きざまにて繪の拙さはしるきなり。すべて三絃は、右に撥をもてれば、右手にてひくこと言ふも更なれど、左手に精神なくては、妙處には到るべからず。いまわが左手の精神、そこの耳に入らぬをもて推すに、繪事もまた筆は右手に持ちて描くいふもさらなれど、おそらくは左手に精神あらじと思ふが故なり」といひき。大雅いたく感服懺悔して、深く恩を謝して歸りて後、繪に深く心や入りたりけん、遂に世に鳴るばかり一家を興されたりき。「これひとへに、安永檢校が恩にて、やがてわが繪の師なり」と常に自ら言はれきとぞ。

はかなきわざといへども、いたりを究めたるきはゝ、人の耳目の及ばぬ所にすら精神は充ちたり。此の物語、もはらわが御國ぶりの要を得たり。もののいはんにも、うちふるまはんにも、文書かんにも、歌詠まんにも、たゞ耳目の及びをのみ限りと心得なばかの安永檢校に笑はれんかし。（北邊隨筆）

三木露風
名は操
詩人
明治二十二年兵庫縣龍野町生

## 九　斑鳩の宮

上宮王の

やまとの國

いましゝ斑鳩の宮。
青葉して、
夏は今盛なり。

推古天皇の聖德太子の御願を遂げるその夢殿

三木露風





古きこの
あとゞころ、
我は立ち、
昔しのべば、
白き日のかぎろひ
照れる中に
幻靑し。

聖德太子

千三百年
まだ稚き若草の文明日本に
吹きめぐる西域の薫りは、
やはらかき詩の佛陀を

金色にたゞよはせぬ。

「日出處の天子
日沒處の
天子に
書を致す。」
と
かの太子
は宣らす、
おごそかに國使をして。
覺哿や慧慈等の聖徒は

覺哿 高麗の僧
慧慈 高麗の僧 推古天皇三年（一三五年）來朝 二人共に聖德太子の師

夢殿觀音





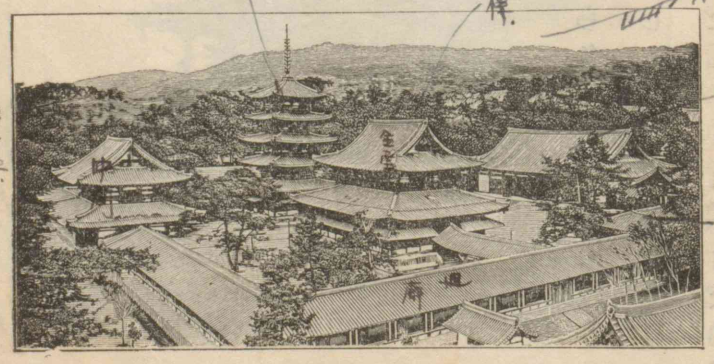
衣を翻して來り、
藝術興り、文明進み、
憲法制定せられて、朝政革る。

## 法隆寺の美

美しき法隆寺は
千三百餘年の昔に建ちけらし。
嗚呼、大いなる日本のこゝろを示す
僧伽藍摩。

僧伽藍摩 Samgharama 僧園 僧舍

見つゝ我が
涙をながす、
東天の菩薩太子、



法隆寺

君がせし功績のあとを。

やまとの國
上宮王の
いましゝ斑鳩の宮、
青葉して、
夏はいま盛なり。（青き樹かげ）

## 10 法隆寺

高濱虛子

法隆寺の金堂にはひつた。明るい處から急に暗い處にはひつたので、初めの間は何も見えぬ。漸くにして印度佛の後が見えて來る。眞四角な天蓋が見えて來る。だん〳〵と樣々な佛體

法隆寺
奈良七大寺の一
推古天皇十五年
聖德太子御建立

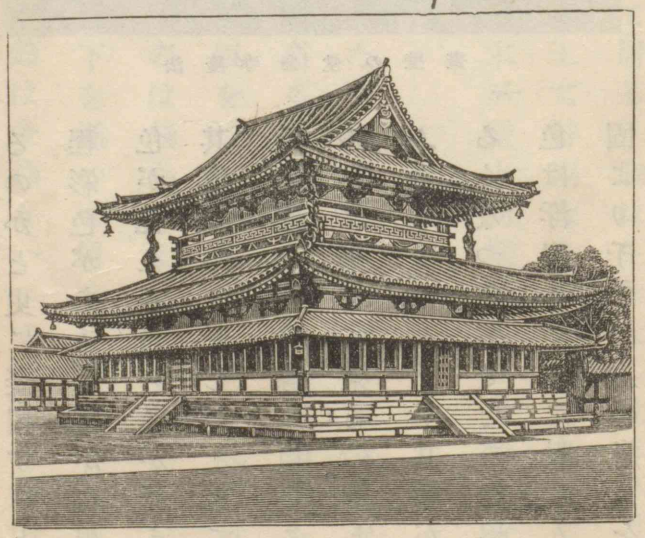
高濱虛子
俳人
小說家
名は清
明治七年愛媛縣
松山市生





が見えて來る。案內者は壁の方を向いて、此の壁畫は朝鮮の僧何某が聖德太子の命を受けて描いたものだといふ。ただ眞黑な壁と思つてゐたが、成程壁畫がある筈だなと眸を据ゑて暗中を見ると、暫くして纖かにそれらしいものが眼に入る。よく見て居ると、頭らしいもの、顏らしいもの、手らしいものなどがだんだん見えて來る。人間よりも稍〻大きい位に描かれて居る佛樣が澤山あるのであつた。案

壁畫
筆者は未詳
鞍作部鳥ともいひ又は高麗の僧
曇徵ともいふ



法隆寺金堂

内者は、此の彩色のうちの、丹いのは珊瑚末だといふ。彩色があるのかと更に凝視すると、成程彩色がある。纔かに碧い色が見える、丹い色が見える。其處ばかりをじつと見て居ると、乏しい光線も自らこれのみに集つて來るのかと思ふやうに、だん〳〵其處が明るくなつて來て、その丹碧の色は浮出るやうに眼に入る。固より千年以上の歳月を經た畫だ。剝げて居る、燻つて居る、輪郭さへ明かで無い。それに

法隆寺金堂の壁畫





拘らず、その丹碧の色は鮮かに眼に入る。千年の古色を呈して尙その中に鮮明な光を湛へて居る。余は生を此の世に享けて以來、未だかゝる重みのある、そして鮮明な色を見たことが無い。その筈だ、珊瑚を粉にした珊瑚末が壁土同樣、惜しげも無く磨り込んであるのだもの。

余はそれから玉蟲の厨子も見た。印度佛も正面に廻つて見た。天蓋も凝視した。一として名高くないものは無い。佛體も一見た。何れにも恍惚として眼をつぶつたが、しかし此の丹碧の色ほど强く心を刺戟したものは無かつた。

それから金堂を出て夢殿の廊下を通つて居る時、りん〳〵と物が鳴つた。案内者が「あの鈴は金鈴といつて、黃金を澤山入れて拵へた鈴ださうです」といつた。その音の好さと云つたら

喩へようにも物が無い。此の法隆寺にあるどの佛體を叩いてもあんな好い音は出まい。極樂淨土で啼くといふ迦陵頻伽の聲も恐らくかうまではあるまいと思つた。それから廊下を傳つて寶藏の方へ行きかけると、又りん〳〵と鳴つた。あゝたまらない好い音だと、立止つて耳を澄ました。此の時ふと、今、案内者は鈴だといつたが、もし彼の金堂の壁畫の色が音を出したのではあるまいかと疑つた。

迦陵頻伽　梵語　美音鳥　妙聲鳥　如來の音聲以外には天人の音聲も及ばぬ好い聲の鳥といふ

Kalavinka

蘭の香も法隆寺には今めかし（俳諧一口噺）

## 二　牡丹

撫村

春の海ひねもすのたりのたりかな　與謝蕪村

牡丹散つてうちかさなりぬ二三片

與謝蕪村　俳人　畫家　本姓谷口氏　夜半亭と號す　攝津國生　天明三年（一七八三）歿　年六十八か



鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな

蕭條として石に日の入る枯野かな

山路來て何ふ城下や凧の數　炭太祇

犬にうつ石のさてなし冬の月

水仙や室町殿の五間床　朝日寺　黒柳召波

鶯や藪をへだて、

繪草紙に鎮おく店や春の風　高井几董

山寺や緣の下なる苔清水

夏

筍やひとり弓射る屋敷守　吉分大魯

炭太祇　俳人　京都生　明和八年（一七七一）歿　年六十三

黒柳召波　蕪村の門人　朝日寺　京都北野神社附屬の寺

室町殿　足利三代將軍義滿の「花の御所」をいふ

高井几董　京都生　寛政元年（一七八九）歿　年四十九

吉分大魯　大阪人　安永七年（一七七八）歿

朝戸出に露引きおとす鳴子かな

日暮れたり三井寺下る春の人　加藤曉臺

秋の山ところ〴〵に煙立つ

川舟や雲雀啼き立つ右左　高桑闌更

枯蘆の日に〳〵折れて流れけり

雀の子そこのけ〳〵御馬が通る　小林一茶

蟻の道雲の峯よりつゞきけん

けふも〳〵絲引きずつて蜻蛉かな

大根引大根で道を教へけり

加藤曉臺
名古屋生
京都住
寛政四年（一七九二）
歿
年六十一

高桑闌更
寛政十年（一七九八）
歿
七十三

小林一茶
信濃柏原生
文政十年（一八二七）
歿
年六十五





## 三　人の問に答ふ

藤田東湖

一兩年以來十數度の貴翰、尚又時々御惠投ものに預り、殊に當春梅花の御贈もの等、實以て御厚意淺からず。僕が頑鈍狂愚、何故、右樣御眷顧下され候や、謝する所を知らず、汗顏の至に御座候。

さて愼中は貴答延引も當然に候處、當二月幽厄を脫し候上は、早速一書を裁し、右數度の御厚意を謝し候筈の處、爾來僕が境界、實以て寸暇もこれなく、尤も日々夕刻大白を傾け候暇はとれあり候へども、其の外はとかく閑隙を得ず、今日始めて貴答に及び候。

一、先年弘道館にて貴兄御面貌はたしかに相覺え候。謂はゆ

藤田東湖
勤王家
水戸藩士
名は彪
安政二年（一八五五）
卒
年五十

愼中
弘化四年（一八四七）から嘉永五年（一八五二）まで水戸に謹愼を命ぜられた

弘道館
水戸藩の學校
天保十三年（一八四二）徳川齊昭これを開く

嶄然頭角
雖少年已自成人能取進士第嶄然見頭角（唐の韓退之が柳子厚墓誌銘）
御國　水戸藩

る嶄然頭角、今以て心目に宛然に御座候處、追々御詩文等拜見、尙又御噂承知致候へば、近年益御研精の由、憚ながら感心仕候。老人くさき申分には候へども、御國も學校御開き以來、讀書家は悉く澤山に相成候へども、眞實の學者は寥々に御座候間、國家のため御勵精尤に存候。僕などは罪名載せて幕府の籍にある身分にて、天地の一棄人に候間、理窟がましきことは一切申すまじと心がけ候へども大義未だ曾て君臣を忘れざる至情もだし難く、且は度々の御細書、御深意をも推察致し、旁〻心事ほゞ吐露仕候

藤田東湖

弘道館記
水戸侯德川齊昭が藩學弘道館を設けた由來を述べて水戸學の精神を明かにしたもの

申すまではこれなく候へども、學問は實學にこれなくては、却て無學にも劣り申候。弘道館記中に「忠孝無二、文武不岐、學問事業不殊其效」と遊ばされ候儀、實に學者立志の模範、志士報國の根本に御座候はんか。今世、親孝行の樣なれども、御奉公は出來ぬ風の人も相見え、又御奉公出來候樣にても、父子の中とくと致さゞる向も相見え候。これら決して聖人の道にあらずと存候。又少々書を讀み候へば何か子細らしき顏色を致し、言語等漢文交りにて□□くさく候へども、劍槍等の藝一切出來申さず、文弱白面の書生と相成候儀、毛唐人ならばそれにて宜しきかも相知らず候へども、かりそめにも神州尙武の域に生れ、且は武家の飯を食ひ候者は、右樣白面の書生は風上へも置きかね候事勿論に御座候。武人の愚にも困り候へど

も、どちらと申候へば、寧ろ文弱の書生にはまさり申すべきか。しかし成るべきだけは、文武岐れず兼備これありたき事、是亦勿論に御座候。

學問、事業その效を殊にせざるに至り候うては、なか〳〵難物なり。僕が輩頑白に相成候へども、今以て學問・事業一致の場合に相成申さず、及ばずながら心を用ひ居る事に候。修己治人の工夫、明倫正名の講究、時々刻々離れ申さず候はゞ、貴兄などは妙齢の御事ゆゑ、必ず學問・事業の一致も御出來なされ候はん。隨分御研精御尤に御座候。

一、讀書は博きを貴び候へども、うはすべり致し候うては、萬卷の書を讀み候とても、用をなしかね候はんか。古人の謂はゆる「眼光紙背に透る」と申すごとく讀みたき事に御座候。次第



次第に後の世に生まれ候ほど、讀書多く相成申候。古人は六史か七史讀み候へば相濟み候が、十七史又は二十一史と申す樣に相成、末が末に相成候はゞ、三十史も五十史も讀み申さず候うては相成らざる譯合故、博きを貴び候中にも、その要を得候儀肝要と存候。人の持前種々これあり候故、一概には申兼候へども、歷史等も唯ばつと讀み候よりは、何か一つ講究著述致す心得にて讀み候方、格別に益を得候樣相覺え申候。制度の事も、文辭の事も、名君賢相の行狀其の外一々記憶致すべしと存候うては、大抵の人にては中々覺え兼申候。東坡が漢書を讀み候法など面白く御座候。尚又御勘考御尤に存候。

一、文章は末藝に候へども、自分にて文を書き候位にこれなく候うては、經書も歷史も本當に解し申されず候間、隨分御餘力

十七史　史記　前漢書　後漢書　三國志　晉書　宋書　南齊書　梁書　陳書　魏書　北齊書　周書　隋書　南史　北史　唐書　五代史　二十一史　十七史及び　宋史　遼史　金史　元史

東坡　某讀漢書至是凡三經手鈔一矣。初則一段事鈔三字爲題、次則兩字、今則一字。（東坡外傳）

大地氏大手粹述鍾　神州秀麗
不二嶽嶺：千秋　洋洋大海水
洋洋環い洲　發芽萬年櫻　泉芳
雜与倚　概　百錬鐵　鋭利の割鞘
蓋臣は無　忠夫盡　好仇　神州
孰　天皇　風俗　古有　天皇　風俗
合　明徳　倖　陽不世　隆正
氣時　此乃　大連　識侃　櫛雲
乃助　明主　斷　談　焚　伽藍中郎
常用之　宗社　磐石　清丸　常用
ミ妖僧　膽寒　拜龍　鉞　使
頭足分　起西州　睨　清　賊妖
氣志賀　月明　陽　鳳輦　芳
野戰　酬　又代　帝子　戈　錦
倉窪　憂　慎　慎　櫻井驛
遺訓　熊　或守　見城一身
萬軍　或狗　天月山　因　忘
天　二百載　斯　常　伸　國

和文天祥正氣歌

李太白長語
七言古詩惟子美不失初唐氣格而縱横有之。太白縱横往々彊弩之末、間雜長語英雄欺人耳。
（唐詩選序）

には御修行御尤に存候。但し近來長短句にてごまかし候詩流行致候處、唐詩選の序にも、李太白長語を用ひ候事を評して、「英雄人を欺くのみ」と申候。今の流行は凡庸人を欺くとも申すべく候。右の類は先々御稽古これなき方と存候。

一、慶元以來、人物林の如く、豪傑も追々に出で候處、其の中にて、仁齋の學問、徂徠の文章、熊澤の經濟、新井の敏捷など、皆畏るべ





東夷の人
日本國夷人物茂卿拜手稽首敬題二碧孔子眞一
（徂徠集）

司馬溫公
北宋の司馬光
字は君實
謚して溫公といふ

朱文公
南宋の朱熹
字は元晦
謚して文公といふ

韓魏公
北宋の韓琦
字は稚圭
魏國公に封ぜられた

其背屈生四十七人乃古人離亡
英靈未嘗泯長生天地有正氣叙
彝倫孰能扶持卓立乎東海濱
崇誠尊　皇室孝敬事　天神
倚文兼奮武誓於清胡塵一朝
天步移　邪奸身是淪頑鈍不易撥
罪戾及孤子　孤子　因菅蕭　天定
向誰陳孤子遠埃塵但知報先親
苦苦二周星獨有斯氣隨遂手
離矣死豈忍与汝稽屈伸付天
地生死又何飛生南雪　天定亦人
張四維死為忠義鬼極天護
皇基

弘化七年仲冬書于北總著
飾郡小堀村寓舍
常陸　隱民

（藤田東湖賦並書）

く存候。併し右の内、徂徠は更に名分を存ぜず、自ら東夷の人と稱し候儀不屆至極に御座候。新井も才氣絶倫に候へども、東都を張立て候志は惡むべく候。さ候へば、今に在つては右數子の長を取り、短を捨て、實學講究致し、孔子の遺意に適ひ候樣、御同意企望致したき事に御座候。今世の儒者動もすれば唐人の事は丁寧に申し、司馬溫公・朱文公・韓魏公などと稱へ、さて新田

井上哲次郎
哲學者
巽軒と號す
東京帝國大學名譽教授
文學博士
安政二年（一八五五）
福岡縣太宰府生
藤原惺窩
江戸時代の儒學の祖
名は肅
播磨國生
元和五年（一六一九）卒
年五十九

義貞が云々、楠木正成が云々など申候類甚だ相濟まず。右樣の人をば僕は、毎々和唐人と唱へ申候、御一笑下さるべく候。その外當世の學風其の弊少からず候へども、迚も、書中に盡くしかね候故、まづその一端を擧げ候のみに御座候。

僕は最早貴地などへ出で候事は終身これなく候間、拜面もむづかしく候處、貴兄は御墓參御對面等にて御歸鄕も御自由ゆゑ、もし來春など一寸も御歸鄕に相成候はゞ、種々存候だけの事は御切磋申すべく候。

先は今日は前文御申譯かたく一書を裁し候事に御座候。併しながら御覽の通り亂筆さぞ御讀みかねなされ候はんと閣筆致候。以上。（寺門誠所藏文書）

天海
上野寛永寺の開基
德川家康以下三代に仕へて信任せらる
寛永二十年（一六四三）寂
年百八
松永尺五
京都の儒者
字は昌三
加賀侯に事ふ
明暦三年（一六五七）歿
年六十六
貝原益軒
筑前福岡藩の儒者
通稱は久兵衛
正德四年（一七一四）卒
年八十五
安東省庵
筑後柳河藩の儒者
名は守約
元祿十四年（一七〇一）卒
年八十

## 一三　木下順庵

井上哲次郎

藤原惺窩の學統を承け、教育家として異彩を放つもの、これを木下順庵とす。順庵、名は貞幹、字は直夫、又錦里と號す。京師の人。幼より强記、善く書を讀み、字を寫し、頗る早熟の徵を現せり。僧天海見てこれを奇とし、以て法嗣とせんとす。順庵從はず。惺窩の門人松永尺五が門に入り、學業大いに進む。尺五乃ち期するに大器を以てせりといふ。順庵跡を東山に潛め、書を讀み、人を教ふること殆ど二十年。其の家塾を雉塾といふ。一世の俊髦來り集り、桃李門に滿つ。こゝに於て順庵の名天下に聞え、臺閣公卿爭ひ引く。一時の名士貝原益軒・安東省庵の如き、亦皆推重して敢へてこれと並ばず、其の聲聞の盛なる、以て想見すべし。加賀侯幣を厚うして順庵を召す。順庵辭して曰く、「余は尺五先

生の門人なり。今先生の嗣子永三あり、未だ仕途に就かず、家道屢〻空し。請ふ先づこれを聘せられよ」と。侯これを聞き、歎じて曰く「順庵の如き古人の風ありといふべし」と。乃ち松永氏と共に之を聘せりといふ。順庵元祿十一年を以て卒す。享年七十八。

木下順庵

私に諡して恭靖先生といふ。

順庵は實に教育家として、成功せるものにして、門下より濟々たる多士を出せり。柴野栗山曰く、

盛なるかな、錦里先生の門人を得るや。大政に參謀するは源

源君美
新井白石
字は在中
將軍家宣に重く用ひられて政事に參した

室直清
鳩巢
字は師禮
將軍吉宗に仕へた

雨森東
芳洲
對馬侯に仕へた

朝鮮語をよくす
松浦儀
霞沼
對馬侯に仕へた

祇園瑜
南海
紀伊侯に仕へた
詩人

榊原玄輔
篁洲
紀伊侯に仕へた
經義を主とし法制に詳し

岡島健
石梁と號す
加賀侯に仕ふ

岡田文
竹圃と號す
紀伊侯に仕ふ

堀山輔
江戸の人
貧に居て志を渝へなかつた

向井三省
滄洲と號す
攝津の人

石原學魯
鼎庵と號す
長崎の人

君美・室直清、外國に應對するは雨森東・松浦儀、文章は祇園瑜・博該は榊原玄輔、皆瑰奇絶倫の材なり。その岡島達の至性、岡田文の謹厚、堀山輔の志操、向井三省の奇節、石原學魯の靜退亦得易からざるもの。師禮の經術、在中の典刑は實に曠世の偉器、一代の通儒なり。それ此の如き數子の賢を以てして、終身先生の訓を奉遵服膺し、敢へて一辭も異同あらず、則ち先生の德と學と想ふべし。

順庵の門人白石・鳩巢・芳洲・南海・篁洲の五人を木門の五先生といふ。次子菊潭、順庵の學を論じて曰く、

先君子、天資穎悟の器を抱き、太平無事の世に遇ふ。一生の受用、道德性命の學を以て根本とし、博聞多識を以て枝葉とす。その詩賦文章の如きは殘膏剩馥のみ。

祇園南海は親しく教を順庵に受くるもの、曾て曰く、

恭靖公は一代の宿儒、道德・文章謂はゆる醇乎たる大賢。賓客・門生薫然として化せざるはなきなり、左右使令充然として醉はざるは無きなり。

室鳩巣又曰く、

嗚呼先生德業の崇き、文章の懿なる、獨り天資の然らしむるのみならず亦學術の自ら致すに由る。故にその行の厚きや、家に在りては親に事へて孝に、以て室家・宗族の類に及ぶ。恩義の厚き至らざる所なし。

是に由りて之を觀れば、順庵が有道の君子たりしこと復疑なきなり。順庵は言論よりは寧ろ實行によりて子弟を感化せしものと見え、道學に關する著書は一もこれなきに拘らず反りて人



ソロモン
Solomon
イスラエル王ダビデの子。西紀前十世紀頃イスラエル全盛時の王



材を養成し教育の効果を不言の中に顯せり。

雨森芳洲その著、たはれ草の中に順庵の事を記して云く、

或人神は聰明正直にして一なりといふ言葉を擧げて「聰明とはいかゞいひたる言葉なるか。」と尋ねしに、「一念こゝに起れば、そのまゝ知り給へばこそ。」とわが師なりし人答へられしに、その座に侍りたる人ども、何れも背中に水を濺ぎたるやうにおぼえ感悟したりき。今書附けて見れば、さまでかはりたる事にもあらねど、まことに會得したる人のいへるは、言詞の外に人を感ずることあるにや。「頭上三尺の天といへることは尊し。」と我が師は常に語りき。

これ順庵が如何に子弟を感化せしかを證するに足るものなり。今その旨意を考ふるに、ソロモンの箴言に「各自の途は神の眼の

長野豐山
伊豫の儒者
伊勢神戸侯に仕ふ
天保八年（一八三七）歿
年五十五

觀瀾
京都の儒者
名は緝明
水戸侯に仕へ大日本史編輯に與る
後幕府に仕ふ
享保三年（一七一八）卒す
年四十五

前にあり。彼は總べてその行爲を量れり」といへるに同じ。東西の暗合も亦奇なりと謂ふべし。

このごろ偶〻長野豐山が松下快談を覽るに云く、

余程朱を尊信すること神明の如し。我が先輩に在りては、獨り順庵・鳩巣二先生に折服す。鳩巣の才德世皆これを知る。今必ずしもこれを論ぜず。順庵先生に至つては世唯目するに溫厚の長者を以てするのみ。先生の德量の大、當時無雙なるを知らざるなり。若しそれ鳩巣・白石・觀瀾・南海・芳洲の數人は皆古の所謂秀才・豪傑にして、各〻長ずる所を擅にし、名聲天下に震耀す。獨り先生默然として能くする所なき者の如し。而して前の數子皆先生に師事す。猶七十子の孔子に於けるがごとく、思うて服せざるなし。これ豈徒に聲音・容貌を以て





柱に膠して
王以レ名使レ括若ニ膠レ柱而鼓レ瑟耳
（史記）

舟に刻んで
楚人有ニ涉レ江者一。其劍自ニ舟中一墜ニ於水一。遂刻ニ其舟一曰。是吾劍之所ニ從墜一。舟止。從ニ其所刻者一入レ水求レ之。舟已行矣。而劍不レ行。求レ劍若レ此不ニ亦惑一乎
（呂氏春秋）

世を欺き名を盜む者の能くし得る所ならんや。先生人を教ふるに、各〻其の材に因つてこれを篤うす。猶孔門の諸子の德行・政事・言語・文學各〻其の材を成すがごとときなり。これ豈腐儒の柱に膠して瑟を鼓し、舟に刻んで劍を求め、一定の權衡を懸けて以て人を待つと同じからんや。先生才を愛し、士を好み、稱譽薦達、唐宋名賢の風度あり。亦余の深くその德量に服する所以なり。

これ亦能く教育家としての順庵が人格・性行を描出するものなり。（日本朱子學派の哲學）

## 一四　鎭西八郎爲朝

新院は齋院の御所より北殿に遷らせ給ふ。左府は車にて參り

新院
崇德上皇

齋院
賀茂社に奉仕せられる皇女
その御所は白河にあつた

左府
左大臣藤原頼長

河原　鴨河の河原に出來た南北の通り
春日　中御門と大炊御門との間の通り
大炊御門　大内裏の郁芳門に通ずる東西の通り

給ふ。白河殿より北、河原より東、春日の末に在りければ北殿とぞ申しける。南の大炊御門表に東西に門二つあり。東の門をば平馬助忠正承つて、父子五人並に多田藏人大夫頼憲、都合二百餘騎にて固めたり。西の門をば六條判官爲義承つて父子六人して固めたり、其の勢百騎ばかりに過ぎざりけり。これこそ猛勢なるべきが、嫡子義朝に附きて、多分に内裏へ參りけり。こゝに鎭西八郎爲朝は、「我は親にも連るまじ、兄にも具すまじ、功名不覺も紛れぬ樣に、唯一人いかにも強からん方へ差向け給へ。たとひ千騎もあれ萬騎もあれ、一方は射拂はんずるなり。」とぞ申しける。依つて西の河原表の門をぞ固めける。北の春日表の門をば左衞門大夫家弘承つて、子供具して固めたり、其の勢百五十騎とぞ聞えし。

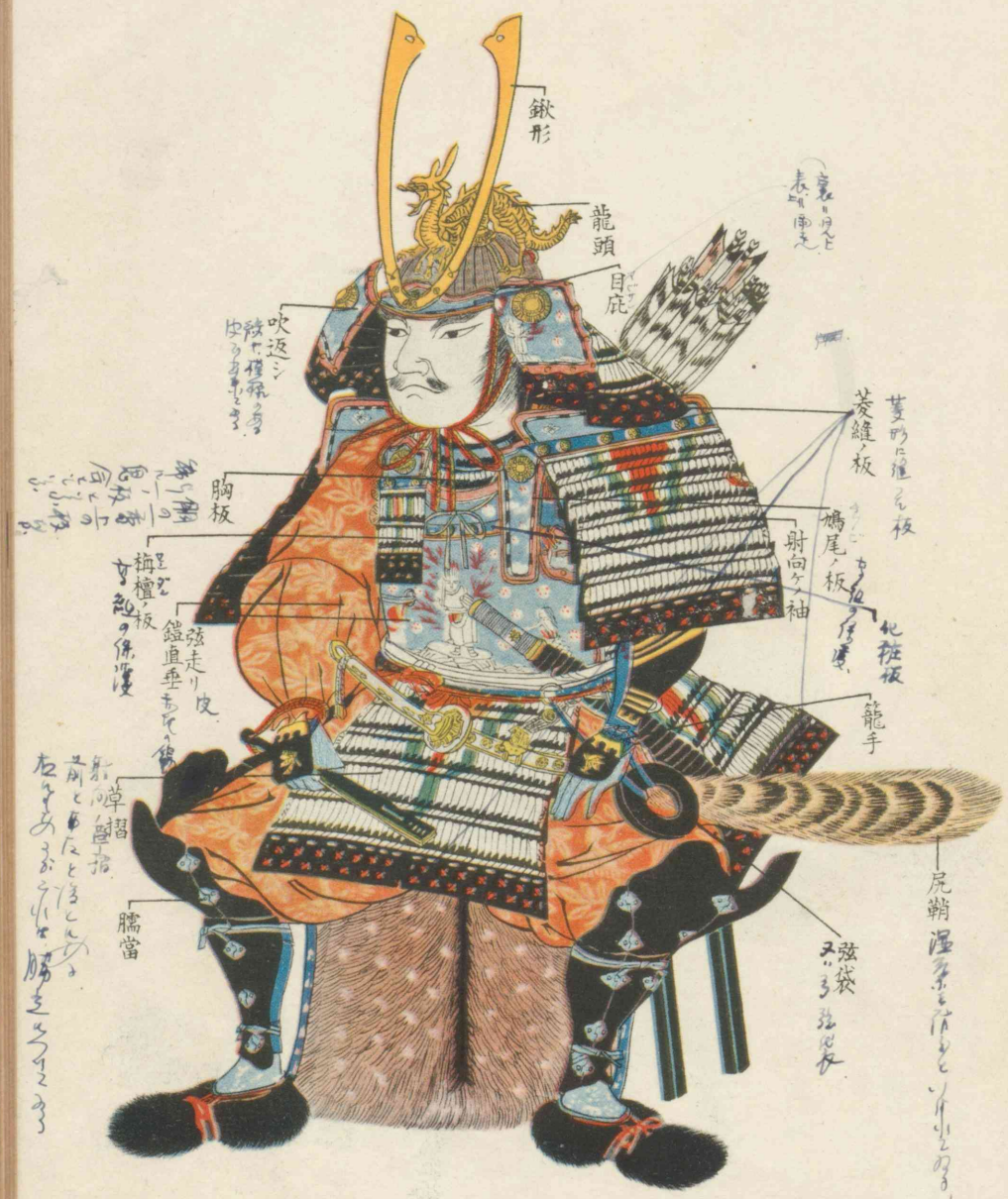




旁若無人　王猛詣二桓溫一面談二世事一。常捫レ蝨而言。旁若レ無レ人。（晉書）

不孝し　不孝者として勘當し。

抑爲朝一人として殊更大事の門を固めたること武勇天下に許されし故なり。件の男、器量人に超え、心飽くまで剛にして、大力の強弓、矢つぎばやの手利なり。弓手の肘馬手に四寸延びて、矢束を引くこと世に超えたり。幼少より不敵にして、兄にも所を置かず、旁若無人なりしかば、身に添へて都に置きなば惡しかりなんとて、父不孝して十三の歳より鎭西の方へ追下すに、豐後の國に居住し、尾張權守家遠をめのとゝし、肥後の阿蘇平四郎忠景が子に三郎忠國が婿に成つて、君よりも賜はらぬ九國の總追捕使と號して筑紫を從へんとしければ、菊池・原田をはじめとして、處々に城を構へてたてこもれば、其の儀ならばいで落して見せん。とて未だ勢も附かざるに、忠國ばかりを案内者として、十三の歳の三月の末より十五の歳の十月まで、大事の軍をすること數




甲冑圖（正面）



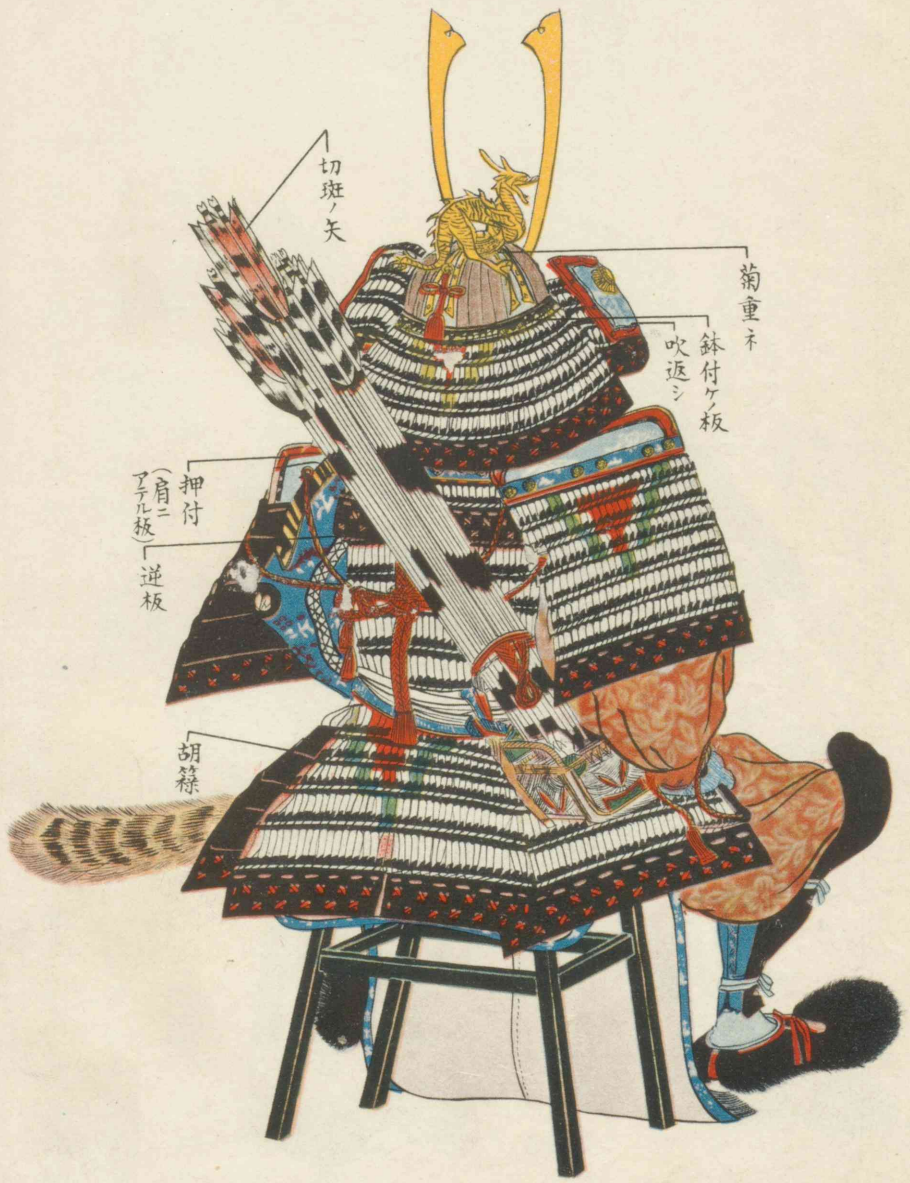
十箇所なり。城を攻むる謀、敵を伐つ術、人に勝れて、三年がうちに九國を皆攻落して、みづから總追捕使におし成つて悪行多かりけるにや、香椎宮の神人等都に上り訴へ申す間、いにし久壽元年十一月二十六日、德大寺中納言公能卿を上卿として、外記に仰せて宣旨を下さる。

香椎宮　福岡縣筑前國福岡市の東四粁にある　仲哀天皇神功皇后を奉祀す　官幣大社

久壽元年　近衛天皇の御世（一八四）

源爲朝、久住宰府忽諸朝憲、咸背綸言。梟惡頻聞、狼藉尤甚。早可令禁進其身。依宣旨執達如件。

然れども、爲朝猶參洛せざりければ、同じき二年四月三日、父爲義を解官せられて前檢非違使に成されけり。爲朝これを聞きて、「親の科に當り給ふらんこそあさましけれ。その儀ならば我こそいかなる罪科にも行はれんずれ」とて急ぎ上りければ、國人どもゝ上洛すべき旨申しければ、大勢にて罷上らんこと、上聞穏便




甲冑圖（背面）

獅子の丸　獅子の形を丸くした紋様
大荒目の鎧　革二三枚を重ね鐵を交へて厚くした札を厚い綴革で荒く縅した鎧
尻鞘　鞘袋
鈌　弓の握りの上に打つ折釘
三十六　普通は二十四位
黒羽　鷲の黒い羽
樊噲　漢の高祖の臣勇猛を以て著る

ならず。とて、形の如くに附從ふ兵ばかり召具しけり。乳母子の矢先拂の須藤九郎家季その兄隙間數への惡七別當・手取與次・同じき與三郎・三町礫の紀平次大夫・大矢新三郎・越矢源太・松浦二郎・左中次・吉田兵衞・打手紀八・高間三郎・同じき四郎を始めとして二十八騎ぞ具したりける。依つて去年より在京したりしを、父不孝を宥して今度の御大事に召具しけるなり。

爲朝は七尺ばかりなる男の、目角二つ切れたるが、紺地に色々の絲を以て獅子の丸を縫つたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて、白き唐綾を以て縅したる大荒目の鎧、同じき獅子の金物打つたる

を着るまゝに、三尺五寸の太刀に熊の皮の尻鞘入れ、五人張の弓長さ七尺五寸にて鈌打つたるに、三十六差したる黒羽の矢負ひ、兜をば郎等に持たせて歩み出でたる體、樊噲もかくやと覺えて

張良　漢の高祖の臣　智謀を以て著る
吳子　周代の兵法の大家　名は起
衞の人
孫子　周代の兵法の大家　名は武　齊の人
養由　周代の弓の名手　楚の人

ゆゝしかりき。謀は張良に劣らざれば、堅き陣を破ること吳子。孫子が難しとする所を得、弓は養由をも恥ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸、恐れずといふことなし。上皇を始め奉つて、あらゆる人々音に聞ゆる爲朝見んとて擧り給ふ。」

源爲朝（菊池容齋筆）

左府乃ち「合戰の趣計らひ申せ」と宣ひければ、畏まつて「爲朝久しく鎭西に居住仕つて、九國の者ども從へ候について大小の合戰數を知らず。中にも、折角の合戰二十餘箇度なり。或は敵に圍まれて强陣を破り、或は城を攻めて敵を滅



高松殿　姉小路の北西洞院の東にあつた假內裏　後白河天皇の御所
駕輿丁　御輿を舁く人夫

すにも、皆利を得ること夜討に若くこと候はず。然れば、只今高松殿に押寄せ、三方に火をかけ、一方にて支へ候はんに、火を遁れん者は矢を免るべからず、矢を恐れん者は火を遁るべからず。主上の御方心にくいも候はず。但し兄にて候義朝などこそ駈出でんずらめ。それも眞中さして射通し候ひなん。まして、淸盛などがへろ〳〵矢何程の事か候べき。鎧の袖にて拂ひ、蹴ちらして捨てなん。行幸他所へ成らば、御免されを蒙つて御供の者少々射んずる程ならば、定めて駕輿丁も御輿を捨てゝ逃げ去り候はんずらん。其の時爲朝參り向ひ、行幸を此の御所へ成し奉り、君を御位に卽け參らせんこと掌を反す如くに候べし。主上を迎へ參らせんこと、爲朝矢二つ三つ放さんずるばかりにて、未だ天の明けざらん前に勝負を決せん條、何の疑か候べき。」と憚

る所もなく申したりければ、左府「爲朝が申す樣、以ての外の荒儀なり。年の若きが致す所か。夜討などいふ事、汝等が同士軍、十騎二十騎の私事なり。さすが主上・上皇の御國爭に源平數を盡くして兩方に在つて勝負を決せんに、むげに然るべからず。其の上南都の衆徒を召さるゝ事あり、興福寺の信實・玄實等吉野・十津川の指矢三町・遠矢八町といふ者どもを召具して千餘騎にて參るが、今夜は宇治に着き、富家殿の見參に入り、曉こゝへ參るべし。彼等待ち調へて合戰をば致すべし。又明日、院司の公卿殿上人を催さんに、參らざる者どもをば死罪に行ふべし。首を刎ぬること兩三人に及ばゝ、殘りはなどか參らざるべき」と仰せられければ爲朝、上には承服申して、御前を罷り立ちてつぶやきけるは「和漢の先蹤、朝廷の禮節には似も似ぬことなれば、合戰の道

指矢三町　指矢はまきわらの矢のやうな輕い矢で遠くは達し難い矢なのに三町の距離に達する上手

富家殿　左大臣頼長の父忠實の宇治の別莊

院司　院の御所に仕へる官人



をば武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御計らひ如何あらん。義朝は武略の奥義を究めたる者なれば、定めて今夜寄せんとぞ仕り候らん。明日までも延びばこそ吉野法師も奈良大衆も入るべけれ、只今押寄せて風上に火をかけたらんには、戰ふともいかで利あらん。敵勝つに乘る程ならば、誰か一人安穩なるべき。口惜しきことかな」とぞ申しける。（保元物語）

## 一五　新しい詩

高須芳次郎

新しい詩の生まれる時代は美しい夢を追ふ時である。理想の青い花を求むる時である。憧憬の眼を輝かして聲朗かに高く歌ふ時である。日清戰後、國民的自覺の精神が强められると共に、社會は活氣づき、人氣は涌立ち、文壇は著しく勃興の機運に向

高須芳次郎　文學者　號は梅溪　明治十三年大阪生

ロマンチック Romantic 傳奇的 情熱的

島崎藤村 詩人 小說家 名は春樹 明治五年長野縣木曾生

蒲原有明 詩人 名は隼雄 明治九年東京麴町生

土井晚翠 英文學者 詩人 名は林吉 第二高等學校教授 明治四年仙臺市生

薄田泣菫 詩人 名は淳介 明治十年岡山縣連島町生

スウィンバーン Swinburne (1837-1909) 英國の詩人

ロセッチ Rossetti (1828—1882) 英國の詩人で畫家

いた。こゝに明治文學の第一躍進時代が來たのである。創作に、評論に、新人が活躍した。しかも全體を通じてロマンチックの色彩が強く詩歌の勃興を促した。新體詩・俳句・短歌などの上に華々しい革新運動が起つた。そしてそれが或程度まで成功の美果を收めたのである。新體詩の革新と勃興とは特に著しいものがあつた。それは機運の成熟にもよつたが、一つは島崎藤村・土井晚翠等を中心に薄田泣菫・蒲原有明其の他の有力な詩人が輩出して詩壇に盡くした爲であつた。

明治三十年八月に出た島崎藤村の「若菜集」は詩界の混沌を破つて、若き日本の詩の向ふところを知らしめた劃期的一產物であつた。內容・詩形・詞藻の上で、藝術的一致を具現した最初の詩集であつた。詩界の黎明の色は「若菜集」によつて濃度を加へて來





濃度を加へて來た。

藤村が「若菜集」を出して新體詩人としての顯著な成功を得たわけは、(一)專念ヨーロッパの詩に讀耽つて、スウィンバーン・ロセッチ等の影響を受けたこと、(二)詩形・用語の上に細心の注意と研究とを傾けたこと、(三)藝術的氣稟が豐かで新時代の感情を代表的に歌ひ出したこと、(四)敍事・抒情兩面に於ける才能を備へたこと、(五)國文學・支那文學の素養が相當にあつたことなどによるであらう。藤村の詩には勿論彼の個性の

島崎藤村

バイロン
Byron
(1788—1824)
十九世紀初頭英國ロマンチシズムの代表的詩人

色彩・匂はあるが、詩人として奔放な情想を披瀝したロセッチや、「バイロンの再生」と稱せられたスウィンバーンの官能的な抒情の歌などに影響せられたことは否まれぬやうである。それに彼自身、有餘る程の情熱を抱いて孤獨の境、漂泊の旅などに自然の美を思ひ、憧憬思慕の感に身を浸したのである。それらの體驗を透して彼は若き日本に於ける青春の人々の感情を直覺して、それを烈しく「若菜集」に歌ひ出したのである。而も彼には藝術的の細心な用意があり、修練があり、優れた技巧があつたから、其の詩の上に何等の破綻を示さなかつたのである。かうして、「若菜集」が劃期的な痕を詩壇に印したのは當然のことだ。勿論、今日から見ると「若菜集」には、感傷的な傾向が多くて、餘りに夢を見過ぎたやうなところがある。人生に對して高踏的、逃避的な





點がある。が、さういふ缺陷があつても、「若菜集」の美點は決して傷つけられない。それはそこに永遠の美しい夢があるからだ、消しても消しても、消えやらぬ情熱の噴泉があるからだ。「若菜集」中の秀拔な詩はどれであるかといふことについては各自の好があらう。私は「深林の逍遙」「四つの袖」「秋風の歌」などを推したい。

涼しいかなや、西風の
まづ秋の葉を吹けるとき。
寂しいかなや、秋風の
かのもみぢ葉にきたる時。

道を傳ふる婆羅門の

西に東に散るごとく、
吹き漂はす秋風に、
飄り行く木の葉かな。

朝羽うちふる鷲鷹の
明闇天をゆくごとく、
いたくも吹ける秋風の
羽に聲あり、力あり。（秋風の歌）

romance 傳奇小説

「若菜集」で成功した藤村は、向上の一路を歩むことを忘れなかつた。其の翌年初夏には「一葉舟」を出し、冬には「夏草」を出して、彼の詩的心境の推移を示した。「一葉舟」には、彼の情熱に一味の沈靜を加へたあとが見える。「夏草」には藤村がロマンスの世界から





現實の世界へ移つて行かうとした心持が見える。此の傾向は三十四年に出した「落梅集」に至つて一層具體化されたことがわかる。感傷主義の殼を破ることは、可なりに困難であつたが、藤村は力めてそれを打破つて現實の上に自己の新しい地盤を築きあげようとしたのである。

情熱の詩人藤村に對して、冥想の詩人土井晩翠が居たのは好個の對照であつた。藤村は女性的、晩翠は男性的、一は考へるよりも先づ鋭く感じ、一は感ずるよりも先づ深く考へる。前者は優雅清新の致を具し、後者は雄健豪放の趣を備へて居る。そして其の何れもロマンチックであつた。

晩翠の詩的成功の原因は、(一)當時彼の如き冥想派の詩人が殆ど居なかつたこと、(二)詩的表現の明快であつたこと、(三)男性的風格

に富んで而も粗放蕪雜に流れなかつたこと等を擧げることが出來る。彼の最初の詩集は、三十二年に出した「天地有情」である。

土井晩翠

そこには、主觀的に人生に對して現實の悲痛・無情を嘆き、一箇理想の天地に憧憬を寄せた詩人の胸懷が明かに洩らされて居る。其の詩想の上にまつはつて居るのは燃ゆるやうな青春の情熱ではなくて、理智に根ざした哲理的な思想の流である。「暮鐘」はそのうちで殊に優れた詩篇である。



祇園精舍　釋迦が說法をした中印度の寺
セントソフィヤ　St. Sophia　羅馬帝ユスチニアヌスがコンスタンチノポリスに立てた古い寺
靈鷲　釋迦が說法をした印度の山
橄欖　耶蘇が傳道したユダヤの山

祇園精舍の檐朽ちて
葷酒の香のみ高くとも
セント、ソフィヤの塔荒れて
福音俗に媚ぶるとも、
聞けや、夕の鐘のうち、
靈鷲・橄欖いにしへの
高き、尊き法の聲。

天地有情の夕まぐれ、
わが驚鷲の夢さめて、
鳳樓いつか跡もなく、
うつゝは脆き春の世や。

岑上の霞たちきりて、
縫へる仙女の綾衣
袖に嵐はつらくとも、
「自然」の胸をゆるがして
響く微妙の樂の聲、

その一音はこゝにあり。

晩翠は「天地有情」の次に、三十四年になつて「曉鐘」を出した。それには、以前よりも現實味が加つて、技巧が進んで居た。また北清事變を主題として「黑龍江上の悲劇」などを歌つた。が、其の詩想の上で何等の向上を見せなかつた。詩的生命の流動が遲緩になつて居た。蓋し彼は藤村のやうに、自己の進路について反省し凝思しなかつたために、早く行詰つたのである。





シェレイ　Shelley (1792—1822)　英國の詩人

キーツ　Keats (1795—1821)　英國の詩人

藤村・晩翠のほかに、稍〻後から出た青年詩人の雙璧は薄田泣菫・蒲原有明である。泣菫は大體に於て藤村と同じ行方をした。最初はロマンチックの情想に浸つて居た。ところが二三年の後には一轉して、現實に親しみ、美しい夢よりも當面の現實に興味を見出すやうになつた。それからが藤村の歩いた道によく似て居ると同時に、恐らく泣菫には藤村から少からぬ感化・影響を受けた時期があつたらうと思はれる。

泣菫の最初の詩篇「暮笛集」は三十二年十一月に出た。彼は中國の生まれで、暖い情緒と溢るゝやうな才氣とを持つて居た。そしてイギリスの詩人シェレイ・キーツなどに私淑して、「希臘古瓶賦」などを愛誦し、「西風の歌」などに共鳴したものだと思はれる。さういふ影響も亦彼の詩の中に見出される。「暮笛集」の熱烈な

情操と清新典雅の格調とは、最初から泣菫の詩的成功を著しくした。そして彼は三十四年に至つて「行く春」を出した。こゝにも「暮笛集」時代の名殘を見ることが出來るが、一方に於て泣菫が農民・田園を始め、當面の時事問題などにも眼を注いで、彼の詩想をそれらに奔らせたものが往々見える。「石彫獅子の賦」は彼の佳什である。

裂けたる岩に爪かけて、
雄々し、憤るかその姿、
鬣ながく背にまきて、
見れば涌きよる春の潮、
胸はゆたかに力男が
曳きしぼりたる弓のごと。

明王
佛法守護の神

怒怒現ずる明王の
ひろき肩より燃えあがる
焔か、長き尾は躍り、
綿毛密なる脚の裏
落ちて野薔薇の花ふむも、
巣くへる鳥は目ざめんや。

雄麗の趣に於て、泣菫の詩の中では珍しいものだ。が、泣菫の闕點は、內容よりも詞藻の上により多く苦心して、ともすると美しい言葉に囚はれ易い傾があつたことだ。ある意味に於て、彼は詞藻美の詩人であつた、藝術至上主義者であつた。で、詩形などの上でもいろ〳〵の工夫を凝らした。八六調其の他に苦心を

重ねて、不退轉の熱心を示した。けれども思想的・情意的に飛躍すべきことを彼は閑却して居た。

蒲原有明は、泣菫よりもやゝ深みのある詩人であつた。少くとも思想的に彼は内在する生命を摑まうとする傾向を持つて居た。「草わかば」は彼の最初の詩集で、靈的神祕の境地に觸れようと力めた。そこから來る煩惱や悶えや寂しさを歌つたのが、三十六年五月に出た「獨絃哀歌」であつた。有明はロセッチに私淑した傾向があつたので、「獨絃哀歌」にはさういふ影が印せられて居た。そして神祕の色と詩的情想とが一つに融けあつて有明の特色・個性が漸く滲み出て居た。今「幻影」の中の二聯を引く。

今眼に入れるかげ見れば、
小甕は浪に燃え浮び、

甕のおもてはかゞやきて
火もて描ける火の少女。
幻影はげにこゝに盡き、
小甕は浪に沈むとき、
わが身――焰の琴の絃、
火の小指もて誰か彈くべき。

以上の四詩人は、何れも浪漫主義の時代を代表する人たちである。そして此の期の一特質として見るべきは史詩の流行である。

つた。それは過去の歴史・人物などの美に對する強い憧憬が中心となつて、史詩を生んだのである。スコットが中世の騎士にあこがれたのと同趣である。白星の「釋迦」、鐵幹・林外・白星等の合作「源九郎義經」、岩野泡鳴の「豐太閤」、其の他多くの史詩が一時續出

スコット
Scott (1771—1832)
スコットランドの詩人で小説家

白星　平木白星
鐵幹　與謝野寛
林外　前田林外

して、ロマンチックな夢をそゝつた。泣菫の如きは此の趨勢につれて、神話の世界を歌つた。（日本現代文學十二講）

## 一六　鷲

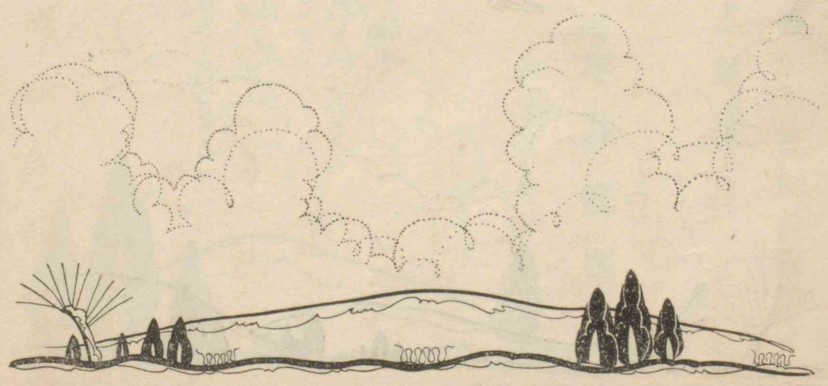
土井晩翠

紫にほふ横雲の（鷲）
露や染めけん花すみれ、
花に戯るゝ蜂蝶の
愛か恨か、うつし世の
はかなき春をよそにして、
大空のぼる鷲一羽、永久の世界の世とぞ思ふ。
嵐は寒し、道さびし。

春の姿はたへなれど、
花の薫はにほへども、
その春よりもうるはしく、
その春よりもかんばしき、
雲居のをちをめざしつゝ
大空高く鷲一羽、
嵐はきびし、道かたし。
背には無限の天を負ひ、
緑雲はねてつんざきて、
飛行くはてはいづくぞや。
望のあした持ちきたる

高きかをりのあととめて、
大空めぐる鷲一羽、
嵐はつらし、道すごし。

嗚呼コーカサス峰高く、
千里の叢雲むらだちて、
下界のひゞきやむところ、
天上の火を奪ひ來し
彼のたぐひか、靑雲の
大空翔る鷲一羽、
嵐ははげし、道遠し。（天地有情）



コーカサス　黑海とカスピ海との間にある山脈
Caucasus



ヴェスヴィヤス　イタリーの活火山ナポリ灣に臨む高さ一二八二米今電車が山頂まで通じる
Mount Vesuvius (Vesuvio)

森林太郎　衞生學者で文學者　鷗外と號す　陸軍々醫總監　帝室博物館總長　醫學博士　文學博士　島根縣津和野生　大正十一年薨　年六十一

ナポリ　ヴェスヴィヤス火山の西南十四粁餘
Naples (Napolis)

アルプス
Alps

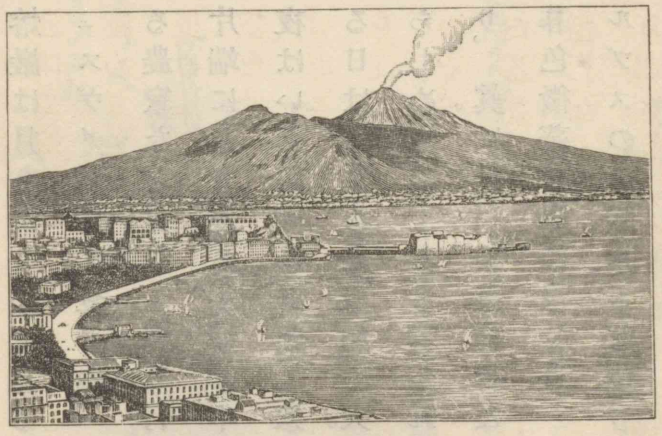
## 一七　ヴェスヴィヤス

森林太郎

熔巖は月あかりにて見るべきものぞとて、我等は暮に至りてヴェスヴィヤスに登りぬ。レジナにて驢を雇ひ、葡萄圃、貧しげなる農家など見つゝ騎り行くに、漸くにして草木の勢衰へ、はては片端になりたる小灌木、半ば枯れたる草の莖もあらずなりぬ。夜はいと明けれど、强く寒き風は忽ち起りぬ。將に沒せんとする日は熾なる火の如く、天をば黃金色ならしめ、海をば藍碧色ならしめ、海の上なる群がれる島嶼をば淡靑なる雲にまがはせたり。眞に是、一の夢幻界なり。灣に沿へるナポリの市は次第に暮色微茫の中に沒せり。眸を放ちて遠く望めば、雪を戴けるアルプスの山脈氷もて削り成せるが如し。紅なる熔巖の流は、今や目睫に迫り來りぬ。道絕ゆるところに、

聖涙酒
葡萄酒の名

黑き熔巖もて被はれたる廣き面あり。驢馬は蹄を下すごとに、先づ探りて而る後に踏めり。既にして一つの隆起したる處に逢ふ。その狀、新に此の熔巖の海に涌出せる孤島の如し。されど其の草木は只丈低き灌木の疎に生ぜるを見るのみ。この處に山人の草寮あり。兵卒數人火を圍みて聖涙酒を飲めり。これは遊覽の客を守りて賊を防ぐものなりとぞ。われらを望み見て身を起し、松明を點じて導かんとす。



ヴェスヴィヤス火山

劇しき風に焰は横さまに吹靡けられ、滅えんと欲して纔かに燃ゆ。我等の往手は巖の間なる細徑にて、熔巖の塊の蹄に觸るゝもの多し。處々道の險しき谿に臨めるを見る。既にして黑き灰もて盛り成したる山上の山ありて、我等の前に横たはりぬ。我等は皆徒立となりて、驢をば口とりの童にあづけおきぬ。兵卒は松明振翳して斜に道取りて進めり。灰は踝を沒し、又膝を沒す。石片又は熔巖の塊ありて、歩ごとに滾り落つるが故に、縱に列びて登るに由なし。我等は雙脚に鉛を懸けたる如く、一歩を進みては又一歩を退き、只一つ所に在るやうに覺えたり。兵卒は、「巔近し、今一息に候」と叫びて、我等を勵ましたり。されど仰ぎ視れば山の高きこと初めに異ならず。一時許にして纔かに巔に到りぬ。われは奇を好む心に驅られて、直ち

に踵を兵卒に接したれば、先づ足を此の山の巓に着けたり。巓は大なる平地にして、大小いろ〳〵なる熔巖の塊、錯落として途に横たはる。平地の中央に圓錐形の灰の丘あり。これ火坑の堤なり。火球の如き月は早く昇りて、此の丘の上に懸れり。我等の來路に此の月を見ざりしは山のために遮られぬればなり。忽ちにして坑口黑煙を噴き、四邊闇夜の如く、山の核心と覺しき處に不斷の雷聲を聞く。地震ひ足危ければ、人々相倚りて支持す。忽ち又千百の巨砲を放てる如き聲あり。一道の火柱直上して天を衝き、迸り出でたる熱石はルビーを嵌めたる如き觀をなせり。されど此等の石は或は再び坑中に沒し、或は灰の丘に沿ひて顚り下り、また我等の頭上に落つることなし。われは心裡に神を念じて、屏息して、これを見たり。

ルビー
Rubi
紅寶名



兵卒は、「客人たちは山の機嫌よき日に來あはせ給ひぬ。」とて、我等を揮きて進ましめたり。われは初めその何處に導くべきかを知らざりき。火を噴ける坑口は今近づくべきにあらねばなり。導者は灰の丘を左にして進まんとす。忽ち見る、我等の往手に火の海の横たはれるありて、身幹數丈なる怪しき人影のその前にゆらめくを。これ我等に先だてる旅客の一群なり。我等は手足を動かして熔巖の塊を避けつゝ進めり。色褪せたる月の光と松明の火とは岩の隅々に濃き陰翳を形づくりて深谷の觀をなせり。忽ち又例の雷聲を聞きて、火柱は再び立てり。手もて探りて漸く進むに、石土の熱きを覺ゆるに至りぬ。巖罅よりは白き蒸氣騰上せり。既にして平滑なる地を見る。こは二日前に流れ出でたる熔巖なり。風に觸るゝ表層こそは黑く凝り

たれ、底は尙紅火なり。この一帶の彼方には又常の石原ありて、一群の旅客はその上に立てり。導者は我等一行を引きて此の火殼を踐ましめたるに、足跡炙るが如く、我等の靴の黑き地に赤き痕を印するさま、橋上の霜を踏むに似たり。處々に斷文ありて、底なる火を透かし見るべし。

我等は彼の旅客の群に近づきて、之と同じく一大石の上に登りぬ。此の石の前には新しき熔巖流れ下れり。譬へば金の熔爐より出づる如し。其の幅は極めて濶し。蒸氣の此の流を被へるものは火に映じて殷紅なり。四圍は暗黑にして、空氣には硫黃の氣滿ちたり。我は地底の雷聲と天半の火柱と此の流とを見聞して、心中の弱處病處の一時に滅盡するを覺えたり。

我等は歸途に就きたり。此の時、身邊なる熔巖の流に、爆然聲ありて、陷穽を生じ炎焰を吐くを見き。されどわれはまた戰き慄ふことなかりき。一行は積灰の新に降れる雪の如きを蹴て、且滑り且降るほどに、一時間の來路は十分間の去路となりて、何の勞苦をも覺えざりき。われも友も心に此の遊の徒事ならざりしを喜びあへり。促し立てゝ共に出づるに、風斂り月明かなり。ナポリ灣に沿ひて行けば、熔巖の赤き影と明月の青き影と、波面に二條の長蛇を跳らしむ。（鷗外全集―即興詩人）

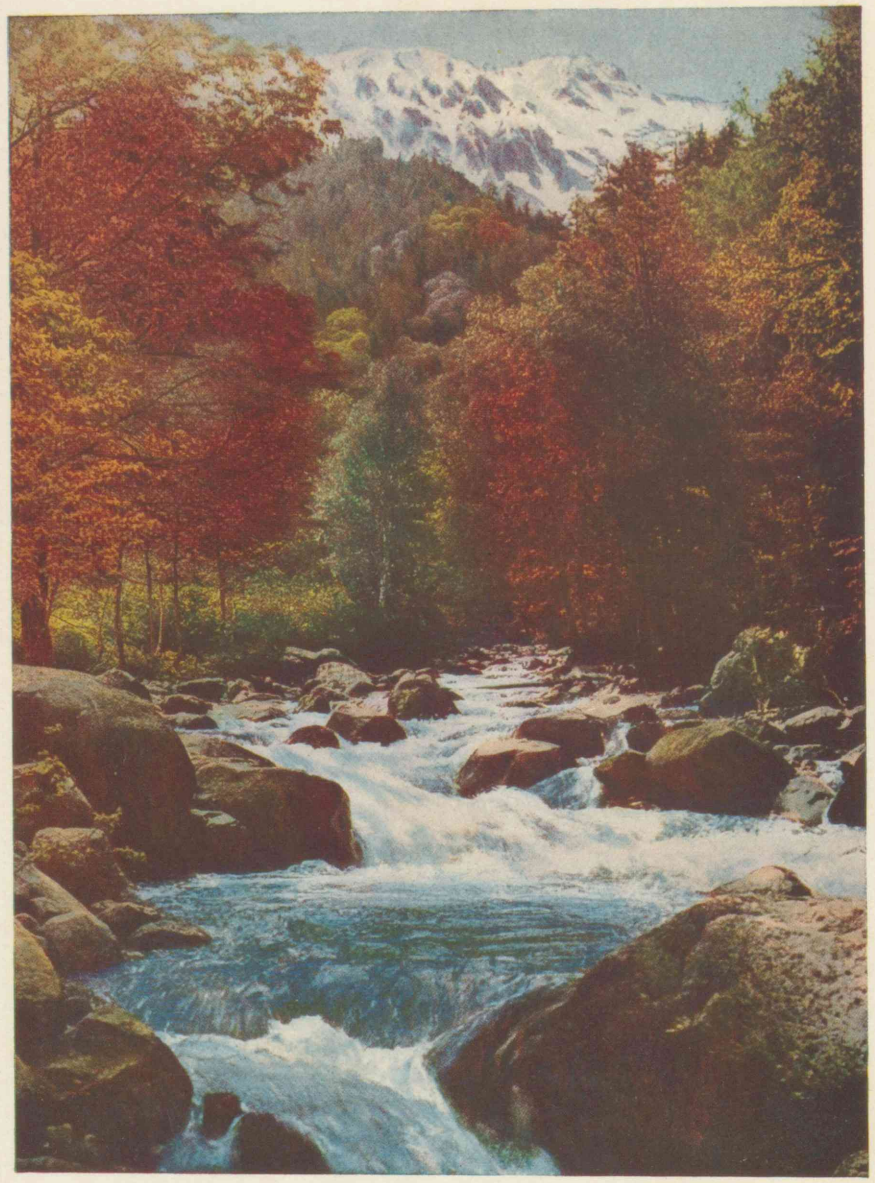
即興詩人
了抹の童話作家で小説家たるアンデルセンの作を森林太郎が譯したもの
"Der Improvisator,,

## 一八　登山

田部重治

あざやかな雪を戴き、朝日を浴びつゝ、地平線上に雄偉なる姿を浮べてゐる山相は、自然が作れる最も偉大なる藝術である。いくたび眺めても仰いでも、それは見る人に雄々しき心と氣高き

田部重治
英文學者
法政大學教授
明治十七年富山縣富山市生



黒部溪谷より見たる立山



理想と漲る血潮とを與へずにはおかない。山の姿ほど無私な心を以て、清淨な魂を以て、あこがれ得るものはない。

山を憧憬し、その姿に自らを空しうすることの出來る心に、純眞ならざるものはない。山を求むる心は、この偉大なる自然の藝術を通じて自然の魂と融け合ひ、それが最も活ける力であることを感ずる。山の姿に憧憬する心の淨化は、かくの如くして絶えず行はれてゆく。

かのアルプスの姿を見て、それを見るに堪へぬほどに醜いと思惟する文學者を多くもつてゐた歐洲の十八世紀は、社會のどの方面に於ても、僞善と常識とに目立ち創造と感激とに乏しい時代であつた。また、歐洲歷史上、自然に對して深い憧憬をもつた時代は、最も意義ある時代であつた。希臘文化の歷史に於て、最

も光輝ある文學藝術を生み出した時代、また文藝復興期、十八世紀末から十九世紀の初めにかけての浪漫的時代は、何れもそれであつた。

日本の歴史に於て、自然を最もありのまゝの姿に於て讃美し、氣高い山の姿に限りない渇望の眼を向けたものは、日本民族の最もあかるい、最も清純な情緒の源泉ともいふべき、かの萬葉の詩人であつた。その後、大自然を崇拜し、それに傾倒する心持は餘り著しく表現されてはゐないけれども、それは一つの傳統となつて民族の一部には登山の風習は絶えることなく行はれてゐた。しかし明治の時代になつてからは、この傾向は急激な歩みを取るやうになつた。即ち大自然崇拜の精神は、登山の一般的風習となり、その文學となり凄まじい勢を以て社會の各方面に

動いてゐる。

かくしてあそこの山、こゝの溪谷は攀ぢられ探究された。のみならず、今まで顧みられなかつた文獻が引出され、山岳・溪谷に關する傳說が求められるに至つた。昔から登ることが不可能とされた山、足を踏入れることの出來ないと思はれてゐた溪谷も、追々知られるやうになつて、今では溪谷の或物を除いては、窮められないところが殆どなくなつた。

しかし山を眞に愛する人には、山を窮め溪谷を探り終へるといふことは、彼の山に對する悅の一小部分に過ぎない。彼の喜悅の大部分は、彼がこれらの自然に對して抱き得る無限の主觀的な情緒に存してゐる。いつまでも〳〵同一の山、同一の溪谷に對してすら涌出する無限の感情に存する。山に對する憧憬は、



かくして絕えず向上し進展する。それはいつも無限に自己を超越する感情である。

一たび頂上を窮めると、その山に對する興味を失ふ人、一つの山が持つ溪谷・深林、その美はしい色調、その朝夕の光線によつて全容に與へる變化、一歩々々を運ぶ間にも起る刻々の響と靜寂との多樣、そしてこれらの官能的に映ずる現象の下を流るゝ自然の生命の動きを認め、それに耳を立てることをしない人は、自然を機械的に見る人でなければならない。

自然の征服といふ言葉は、近代人の作つた最もあさましい言葉の一つである。山に憧憬する人の抱く心は、いつも自然との一致融合でなければならない。最もよい意味に於て、自然を征服することは、自然を最もよく理解し、自然と融合することでなけ

ればならない。

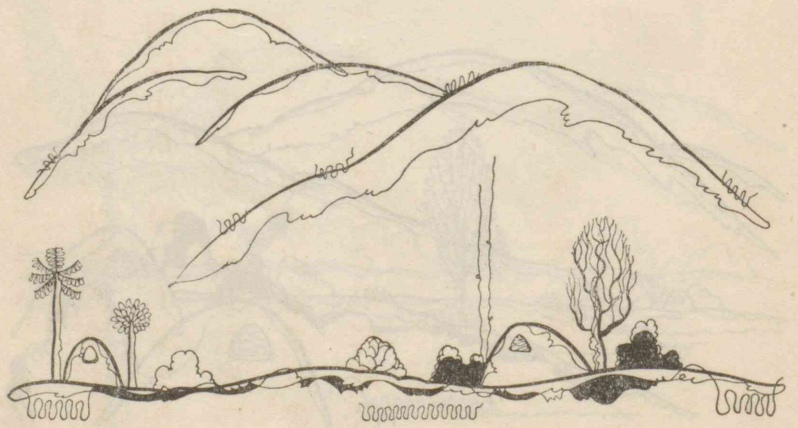
私は山を愛するといふことは、量的に見た山岳の跋渉に存するのではなくして、飽くまで主觀的に、質的に山岳に對して深まり行く情緒に存することを深く信ずるものである。そしてその意味に於て、私は山を愛するものにとつては、登山は山を登り盡くすといふことで決して行詰るものではないことを茲に斷言したい。（山と谿谷）

島木赤彦
歌人
教育家
本名久保田俊彦
大正十五年歿
年五十一
建御名方神
大國主神の第二の御子
出雲の國から信濃の諏訪におうつりになつた
上諏訪神社に祀られる

## 一九　山國の歌

建御名方　島木赤彦

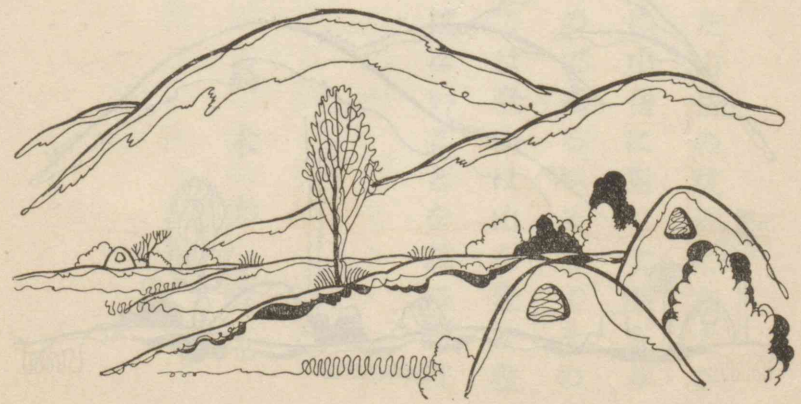
神のみことの
神うつり
御座高知り
いや昔の國
たゝなはる　たたなはる　重疊
嶺高圍む
みづうみに
冬さり來れば
氷はる國
日の本の
山なみ千なみ
青雲の



空にきはまり
湖清き國

なまよみの　（甲斐の枕詞）
甲斐が根の雲に
隣りして
たか原のうみに
みふね漕ぐ國

山すその
野路のをすゝき
打ちなびき



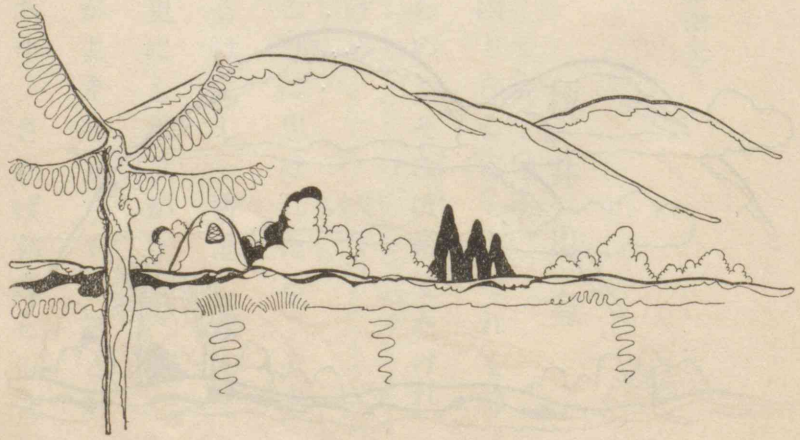




ゆくてに不盡の
ちさく見ゆる國

み冬月
雪はだらなる
荒磯田に
いでゆのゆげの
立ちのぼる國

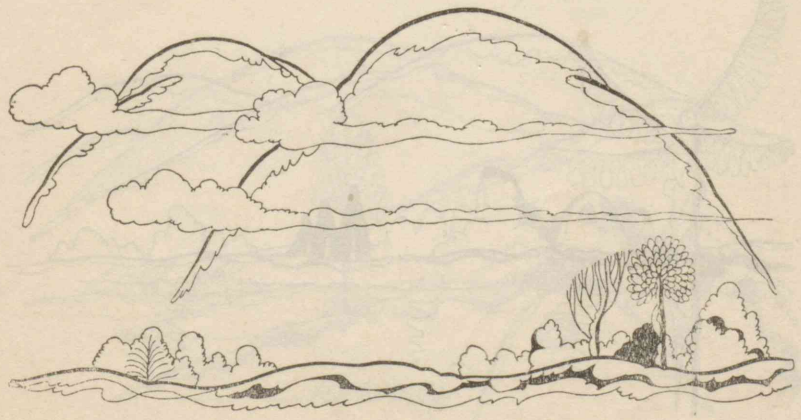
日本べに
山はおほけど
くすりぐさ



いたゞきのくもに
ぬれて咲く國

山人ら
寒天つくらすと
わたつみの
海草をはこび
雪に晒す國

生絲ひくと
甲斐の少女ら
春きたり





横井也有
尾張名古屋の俳人
天明三年（一七八三）
歿
年八十二

莊周
昔者莊周夢爲ニ胡蝶一、栩々然胡蝶也。自喩レ適レ志與、不レ知レ周也。俄然而覺、則蘧々然周也。不レ知下周之夢爲ニ胡蝶一與、胡蝶之夢爲レ周與上。（莊子）

古今の序
花に鳴く鶯水に住む蛙の聲を聞けば生きとし生けるものいづれか歌をよまざりける（古今集序）

古池
古池や蛙飛込む水の音（芭蕉）

山べさむけみ
冬かへる國
（赤彦全集――山上湖上）

## 二〇 百蟲譜

横井也有

蝶の花に飛びかひたる、優しきものゝ限りなるべし。それも啼く音のあいなければ、籠に苦しむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ莊周が夢もこのものに託しけめ。蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風靜まりて遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目さましたれば、このものゝこと更にも謗りがたし。

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。やゝ日ざかりに啼きさかる頃は、人の汗絞るこゝちす。されば初蝶とも初

やがて死ぬ
やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲（芭蕉）

筆蹟
梅の散るあたり
や炭のあき俵
七十九翁蘿隱

貧の學者
晋の車胤

蛙ともいふことを聞かず、このものばかり初蟬といはるゝこそ大きなる手柄なれ。「やがて死ぬけしきは見えず」と、このものゝ上は翁の一句に盡きたりといふべし。

螢は類ふべきものなく景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすだく、五月の闇は、たゞこのものゝ爲にやとまでぞ覺ゆる。

然るに貧の學者に捕へられて油火の代りにせられたるは、このものゝ本意にはあらざるべし。歌に螢火と詠ませざるは殊の外の不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。

横井也有筆蹟

茅蜩は多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎてゆふべは草に露おく頃ならん。つくゝぼふしといふ蟬はつくしこひしともいふなり。「筑紫の人の旅に死して、このものになりたり」と世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。

芋蟲は腹立つものにたとへ、毛蟲はむつかしき親父の號とす。背蟲・吝蟲は名のみにして蟲ならず。油蟲といふは蟲にありて憎まれず、人にありて嫌はる。

蠶の生涯は世のために終り、火取蟲は誰がために身を焦すや。蜉蝣（かげろう）ははかなきためしに引かれ、蓼食ふ蟲は物ずきの謗となれり。

同じ實の名に呼ばれて、玉蟲は優しく、黃金蟲は賤し。

槐安の都

淳于棼醉夢人ニ大槐安國ニ見レ王。王曰吾南柯郡屈レ卿爲レ守。凡二十載。使者送ル田レ穴。遂寤。尋ニ古槐下蟻穴ニ乃槐安國。又一穴直上ニ南枝一即南柯郡也。（異聞集）

蟷螂

欲以蟷螂之斧一禦隆車之隧（文選）

原・吉原

共に東海道の宿沼津の西

蟻は明暮に忙しく世の營に隙なき人に似たり。東西に聚散し、餌を求めて止まず。いつか槐安の都を逃れてその身の安きことを得ん。さるも便あしき方に穴をあけて千丈の堤を崩すべからず。

狗の齒に嚙まるゝ蚤はたま〳〵にして、猿の手に探らるゝ虱は免るゝこと難かるべし。

蟷螂のやせたるも斧をもたる誇よりその心いかつなり。人の上にもこのたぐひあるべし。

蟹の歩に譬ふべきものこそなけれ。たゞ原・吉原を駕籠にのりて富士を眺めゆく人に似たり。

促織・鈴蟲・轡蟲はその音の似たるをもて名によべり。松蟲のその木にもよらで、いかでかく名をつきたるならん。毛生ひ、むくつけき蟲にも、同じ名ありて、松をからし、人にうとまる。一在所に二人の八兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲の類なるべし。

蚊は憎むべき限りながら、さすが卯月の頃端居珍しき夕始めてほのかに聞きたらん、又は長月のころ力なく殘りたるは、寂しき方もあり。蚊帳つりたる家のさま蚊やりたく里の煙など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊はことに烈しきを、かの竹林の七賢の夜話には、いかに團扇のひまなかりけん。（鶉衣）

竹林の七賢

嵇康　阮籍　山濤　向秀　劉伶　阮咸　王戎

## 三　東路の旅

東山の邊なるすみかを出でて逢坂の關打過ぐる程に、駒ひきわたる望月の頃もやうく近き空なれば、秋霧たちわたりて、深き

逢坂の關

逢坂の關の清水にかげ見えて今や曳くらむ望月の駒（紀貫之）

遊子
遊子猶行ニ於殘月ニ函谷雞鳴。
（和漢朗詠集）

蟬丸
宇多天皇の皇子
敦實親王の雜色
琵琶の名人

藁屋
世の中はとても
かくても過して
ん宮も藁屋もは
てしなければ。（蟬丸）

打出濱
今の大津市の内
松本石場あたり

大津宮
滋賀郡滋賀村滋
賀里にあつた
大津市の北四粁

夜の月影ほのかなり。木綿付鳥かすかに音づれて、遊子なほ殘月に行きけん函谷の有樣思ひ出でらる。昔蟬丸といひける世捨人、この關のあたりに藁屋の床を結びて、常は琵琶を彈きて心を澄まし、和歌を詠じて懷を述べけり。嵐の風の烈しきを侘びつゝぞ過しける。

いにしへの藁屋の床のあたりまで心をとむるあふさかの關

關山を過ぎぬれば、打出濱・粟津原など聞けども未だ夜の中なれば、さだかには見え分かず。昔天智天皇の御代、大和の國飛鳥の岡本宮より近江の志賀の郡に都遷りありて、大津宮を造られけりと聞くにも、このほどは古き皇居の跡ぞかしと覺えてあはれなり。





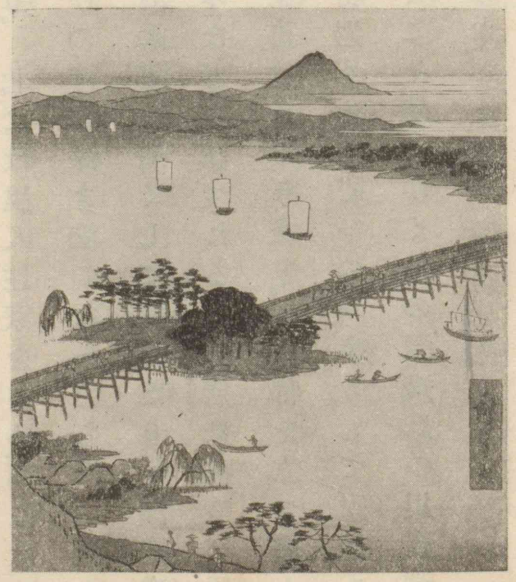
滿誓沙彌
笠朝臣麻呂
幾老頃の人

漕ぎゆく舟
世の中を何にたとへんあさぼらけこぎゆく舟のあとの白波
（拾遺集）

さゝなみや大津の宮のあれしより名のみ殘れる志賀の故郷

曙の空になりて、勢多の長橋打渡すほどに、湖遙かにあらはれて、かの滿誓沙彌が比叡山にてこの海を望みつゝ詠めりけん歌思ひ出でられて、「漕ぎゆく舟のあとの白波」誠にはかなく心細し。

世の中をこぎゆく舟によそへつゝながめし跡をまたぞながむる



勢多の長橋（廣重筆）

野路
滋賀縣栗太郡老上村野路
勢多の東四粁

南山の影
昆明春。昆明春。春池岸古春流新。影浸ニ南山一青滉瀁。波沈ニ西日一紅淵淪。（白氏文集）

かつみ
眞菰

飛鳥川の淵
世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる（古今集）

この程をも行きすぎて、野路といふ處に到りぬ。草の原露繁くして旅衣いつしか袖の雫ところせし。篠原といふ處を見れば、西東へ遙かに長き堤あり。北には里人住家を占め、南には池の面遠く見え渡る。むかひの汀、綠深き松のむらだち、波の色も一つになり、南山の影を浸さねども、青くして滉瀁たり。洲崎處々に入りちがひて、葦かつみなど生ひ渡れる中に、鴛鴦鴨の打群れて飛びちがふさま、葦手を書けるやうなり。昔、都を立つ旅人この宿に泊りけるが、今は打過ぐるたぐひのみ多くして、家居もまばらになりゆくなど聞くこそ、變りゆく世の習、飛鳥の川の淵瀬には限らざりけりと覺ゆれ。

行く人もとまらぬ里となりしより荒れのみまさる野路の篠原



武佐寺
滋賀縣蒲生郡武佐村長光寺

とこ
滋賀縣犬上郡鳥籠山また床山
彦根町の北

遺愛寺
日高睡足猶慵レ起、小閣重レ衾不レ怕レ寒。遺愛寺鐘欹レ枕聽、香爐峰雪撥レ簾看。（白氏文集）

醒井
滋賀縣坂田郡醒井村

行きくれぬれば、武佐寺といふ山寺のあたりに泊りぬ。まばらなるとこの秋風夜更くるまゝに身にしみて、都にはいつしか引きかへたるこゝちす。枕に近き鐘の聲、曉の空に音づれて、かの遺愛寺の邊の草の庵の寢覺もかくやありけんとあはれなり。行末遠き旅の空、思ひ續けられていたいたう物悲し。

都出でていくかもあらぬ今宵だにかたしきわびぬとこの秋風

音に聞きし醒井を見れば、陰暗き木の岩根より流れ出づる清水あまり涼しきまで澄渡りて、げに身にしむばかりなり。餘熱未だ盡きざる程なれば、往還の旅人多く立ちよりて涼み合へり。かの西行

道のべに清水流るゝ柳かげしばしとてこそ立ちどまり

つれ〳〵と詠めるもかやうの處にや。

道のべの木かげの清水むすぶとてしばしすゞまぬ旅人ぞなき

柏原といふ處を立ちて、美濃の國關山にもかゝりぬ。谷川、霧の底にも音づれ、山風、松の梢にしぐれわたりて、日影も見えぬ木の下道、あはれに心細し。越えはてぬれば不破の關屋なり。萱屋の板庇年經にけりと見ゆるにも、後京極攝政殿の「荒れにし後はたゞ秋の風」とよませたまへる歌思ひ出でられて、この上は風情もめぐらしがたければ、鄙しき言の葉を殘さんもなか〳〵に覺えて、此處をば空しく打過ぎぬ。

株瀨川といふ處に泊りて、夜ふくる程に川端に立出でて見れば、

柏原
滋賀縣坂田郡柏原村

不破の關屋
岐阜縣不破郡關ヶ原町にあつた

後京極攝政
藤原良經
建永元年（一二〇六）
薨
年三十八

荒れにし後
人すまぬ不破の關屋の板びさし
あれにし後はただ秋の風
（新古今集）





秋の最中の晴天、清き川瀨にうつろひて、照る月浪も數見ゆばかりに澄渡れり。「二千里の外の故人の心」思ひやられて、旅の思いとゞ抑へ難く覺ゆれば、月の影に筆を染めつゝ、

花洛を出でて三日、
株瀨川に宿して一宵。
しば〳〵幽吟を中秋三五夜の月に傷ましめ、
かつ〳〵遠情を前途一千里の雲に送る。

などある家の障子に書きつくるついでに、

知らざりき秋のなかばの今宵しもかゝる旅寢の月を見んとは

（東關紀行）

芳賀矢一

株瀨川
岐阜縣不破郡にある川
今は川筋が變つた

照る月なみ
水のおもに照る月なみをかぞふればこよひぞ秋の最中なりける
（拾遺集）

二千里の外
三五夜中新月色
二千里外故人心
（白氏文集）

芳賀矢一
國文學者
東京帝國大學教授
國學院大學長
文學博士
福井生
昭和二年薨
年六十

## 三　月雪花

芳賀矢一

赫々たる活動の日の光西に沈めば、玲瓏たる一輪の月、休息の夜を照らす。月の光は溫和で日光の樣に峻烈ではない。日は仰いで見ることも出來ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一たび出れば、群陰皆影を伏して大小の有象・無象悉く照破されるのであるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤・貧富の差別を失はせて了ふ。月の光は慰安の光である、慈愛の光である、炎熱を伴はない清冷の光である、高潔・無垢・崇美と稱ふべきやさしい光である。休息安靜の夜には最もふさはしい。この光に對しては誰しも人生の慰藉を感ずる、詩的情緒が油然として涌く。晝の間は猛獸と鬪つて居る熱帶の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱帶の椰子の陰、寒地の氷雪の家、眺める人の心は違ふであらうが、隈なく世界を照らす月光の人の胸懷に

うちむかふ
荷田蒼生子の歌

しみ渡ることは、恰もその影の千草の露の玉毎に宿るやうなものである。「打向ふ月は一つの影ながら、うかぶはちゞの思なりけり」である。東西・古今、悲喜・哀歡の情熱は幾萬回となく、幾億回となく、この光に向つて訴へられた。之を嘆嗟し、之を吟咏した詩歌は世界各國の言語に充ち滿ち

月　（瀧和亭筆）

て居る。天文學者はいふ、「月は地球の衞星で全く死んだ冷塊である。」と。この冷い光が古往今來どれ程の暖みを人間に與へたか、又與へつゝあるか。月は永久に人間の良友である。

花ならば
花ならば咲かぬ梢もまじらまし
なべて雪ふるみ吉野の山（仙覺）
三千世界
宋の劉師道の詩

雪は月よりも一層冷い。貧富・貴賤の差別なく、その純潔の色を以て乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。高樓・茅屋もみな同じ色に埋められる。げにや「花ならば咲かぬ梢もまじり」なんなべて雪降るみ吉野の山」といふやうに眼に入るもの、悉くその下に包まれてしまふ。「三千世界銀成色、十二樓臺玉作層。」の美觀は一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を抱かしめる。天から落ちて來るこの純白の色に比べては、地上の花も甚だしく汚く感ぜられるのである。霏々と散り、紛々と飛んで唯一條の川を殘して、山といはず、野といはず、またゝく中に瓊玉を敷く莊嚴の觀は、眞に人目を眩せしめるのである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しもかはらぬ。花紅葉色々の眺はもとより美しいに相



違ない、花の散つたのちの新綠の色も目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉もない冬枯の時に地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙、變化の奇、造化の巧を盡くしたものではあるまいか。一年中蓮の花の開いて居る極樂淨土は決して我等の世界程樂しいものではないであらう。

雪　（瀧和亭筆）

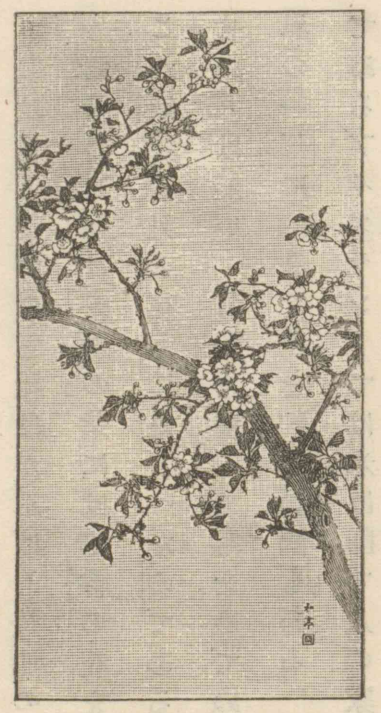
雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪は唯一色である。花

のさま〳〵どれを見ても美しいのが、四季につれ、咲きかはり咲きみだれるのは、人生としては餘りに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に、かうばしい匂さへもつて居る。菜や大根の如く食用の爲に作つた野菜類の花でも無限の詩趣を備へて居る。富貴の庭園に培ふ花に價の生じたのは無理は無いが、山の花、野の花いづれも月や雪と同じ樣に、一文錢を要せぬのである。人世に花なくんば、いかばかり寂寞を感ずるであらう。閑寂を旨とする茶室の內にも、床の間に一輪の花が必要である。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。人は死んでも花を忘れぬのである。月雪のながめはその高潔を愛しその淸淨を貴ぶが、花はその艶麗華美を以て人世を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ・花やか・花々しい・華美・華麗・華奢等の語は皆花に

花をし見れば
年ふれば齡は老
いぬしかはあれ
ど花をし見れば
物思もなし
（藤原良房）

やまざくら
康資王母の歌

基づいた語である。古今・東西の詩歌は擧げるだけ愚である。余は唯「花をし見れば物思もなし」といふ古歌を以て、總べてを總括し得べしと信ずる。



花　（瀧和亭筆）

やまざくら花の下風吹きにけり木のもとごとの雪のむらぎえ

これは花を雪にたとへたものである。

月雪花三つのながめは各〻その特色がある。いづれを前いづれを後といふことが出來ぬ。

冬ながら
清原深養父の歌

笠は重し
謠曲葛城の句

アイスランド
Iceland

冬ながら空より花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらん

これは雪を花にたとへたのである。

笠は重し、吳山の雪、靴はかんばし、楚地の花。肩上の笠には無影の月を傾け、擔頭の柴には不香の花を手折る。

これは雪を月と花とにたとへたのである。花を賞して月を愛せぬ人は無い。月花を愛して雪をめでぬ人も無い。思へば世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中氷雪に鎖されてゐるアイスランドでは、氷は卽ち人の家である。この地の人は寸紅の、眼を樂しませるものも持たない。又之に反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱帶の住民は、瓊玉を綴る奇觀は見たことがない。瓦斯・電燈の光に不夜

世々を經て
伊藤仁齋の歌

年々歲々
唐の劉廷芝の句

城の觀を呈して夜深を知らぬ繁華な倫敦の住民も、秋冬の半年は美しい月の光を見ることが出來ない。我等日本人が、昔も今もこの三つの眺を擅にすることを得るのは、眞に天與の幸福ではあるまいか。

月雪花のながめは古人の歷史が加つて一層の感興が增す。

世々を經てながめし人の數にまだわれをもゆるせ秋の夜の月

月は古來の歷史を照らす鏡である。

年々歲々花相似、歲々年々人不同。

鬢の霜、頭の雪。人生の感は花を見てます〳〵繁く、雪を見ていよいよ多いのである。

二千五百有餘年來、月雪花三つのながめを有し得るわれら祖先

の遺蹟は、如何に多くの感興を與ふるよ、如何に多くの追慕をわれらに催さしむるよ。（月雪花）

相馬御風
文學者
名は昌治
明治十一年新潟縣糸魚川町生

## 二三　縮むもの、力

相馬御風

故人石川啄木の歌に、

一晩に咲かせて見んと梅の鉢を火にあぶりしが咲かざりしかな

といふのがある。此の歌を時々私は思ひ出して口ずさむが、そのたびに私はまづ此の一首の歌に籠められた作者の皮肉な心持に一種の輕い苦笑を誘はれるのである。しかし其の苦笑感は忽ちにして作者その人に對する痛ましさの感じに變つて、私を深い憂鬱にさへ陷れることがある。

石川啄木
新聞記者
名は一
岩手縣生
大正元年歿
年二十七



「何といふ痛ましい焦燥であらう。」

石川啄木

かう私の心が叫ぶと同時に、私は石川啄木その人のあの晩年の苦悶生活の底知れぬ暗さを思ひやらずには居られぬのである。花は咲くべき時に到らなければ決して咲かない。咲くべき内部の力が充實し切つた瞬間に達しなければ、花は決して咲きはしない。それを火にあぶつてまでも無理に咲かせようとして焦り狂つてゐる其のいらだたしい心、それほど惱ましい心がまたとあらうか。

それについて思ひ出すのは、嘗て私は長い北國の冬籠りのわびしさの中にあつて、鉢植にして置いた雛菊の花の唯一輪開くのを見たゞけの事によつて、限りなく大きな歡を與へられた事についてゞある。私はその時の經驗について、當時次のやうなことを何かに書きつけたと記憶する。

ほんのりと雪明りのさしてゐる窓際の臺の上に置いた鉢植の雛菊が、やうやく一輪だけ咲いた。いかにもやはらかさうな綠の葉の間から二寸ほどの莖を眞直に伸して、その上に白い小さな花が小首をかしげながら咲いてゐる。僅かにこの小さな一鉢の春の草を眺めてゐるだけでも、私にとつては測り知るべからざる歡がある。花は無論部屋のぬくみがあればこそ咲いたのだ。しかし、又それは單にぬくみだけで咲いたのではない。曇硝子を透して來る光線も、無論それに與つてゐる。けれども花はやはり花それみづからの生命の力の充實を俟つて始めて開いたのだ。外からの力がいかに加つても、內なる生命の充實を得なければ花は咲かない、花の開くその最後の一瞬間の生命の充實——それを私は始めてしみじみと見入ることが出來た。僅かに一つの小さな鉢に植ゑられた此のさゝやかな生命あるものゝ働によつて、私の書齋全體がいかに活氣づけられたことか。

「花が咲いた。花が咲いた」

子供たちまでが此の小さな一輪の花の咲いたことによつて、躍り上らんばかりの歡を與へられたのである。

私は今かうした其の時の私の氣持と、前に掲げた病詩人啄木の

歌にこめられた悲痛な心とを比べて、今更のやうに深く考へさせられるのである。

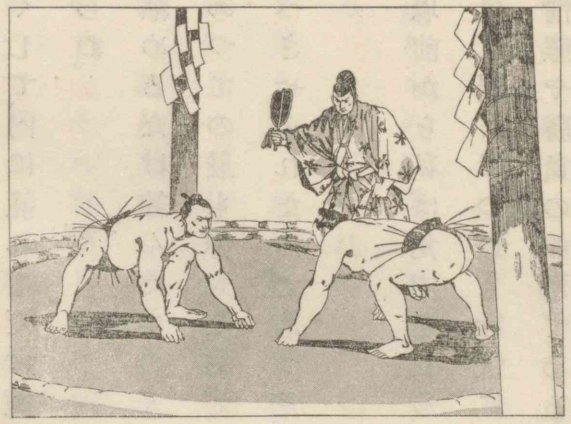
「縮むものに彈力あり」――私たちはよくさうした言葉を耳にする。そしてそれによつていつも深く自らを警められてゐるのを覺える。だが、私はそれを儼然たる一箇の事實として私の心眼に見せられたのは、前述の私の經驗によつてゞあつた。

固く結んだあの小さな花の蕾のうちにこめられた偉大な生命の力。それを感じさせられたあの瞬間の私の感激は、全く何といつて見やうもなく尊いものであつた。外に向つて花と開く力は實に內に向つて貯へられるだけ貯へられ、籠められるだけ籠められた力の極致である。堅い地面を破つて小さな物の種の芽の伸出る力、厚い殼を破つて卵の中から鳥の生まれ出る力、いづれもこれ決して外に出ようとのみあせり立つた力ではなくして、內に籠れるだけ籠つた力のおのづからなる爆發に外ならぬ。

縮めるだけ縮んだものゝうちに充實しきつた力こそ此の世にあつての最も偉大な力ではないか。そんな事を私は同時に考へさせられたのであつた。

以前から私は角力を見ることが好きであつた。しかし、角力を見て居て私の最も壯快に感ずるのは二個の人物の鬪つてゐる情態や勝負の如何であるよりも、二人の力士が互に睨み合つたあの瞬間の緊張味である。土俵の眞中で二人の力士の睨み合

つた瞬間に於ける肉體の緊張ほど美しい人間の肉體を私は他に見ることが出來ない。不斷見ると馬鹿々々しいまでに大きな體の持主であるその人も、あの瞬間に於てのみは少しも大きいといふ感じを與へない。縮まれるだけ縮まつてゐる。肉體のあらゆる部分に力が充實して、すべての筋骨が緊縮されるだけ緊縮してゐる。恐らくあの瞬間に於ては、强弓の矢をも、彼等の肉體は彈返すであらう。石を投げつけても傷つかないであらう。



仕切中の力士



文覺
平安末期より鎌倉初期へかけての僧
俗名遠藤盛遠
山城國高雄神護寺に住す
正治元年（一八五九）寂
年八十

だからこそ、角力を見るに巧者な人は、あの瞬間に於て既に勝負を見定めることが出來るのである。試みに互に睨み合つた瞬間に於ける力士の體軀と、「待つた！」といつて手を引き、立上つた瞬間の力士の體軀とを注意して比べて見たまへ。その間に何といふ驚くべき相違の有することであらう。

內部に籠められた力に於て勝る時、人は往々戰はずして勝ち、鬪はずして他を服せしめることが出來る。西行法師を打たうとした荒行者文覺が、西行法師の姿を見たゞけで、その尊嚴にうたれて平伏したといふ話もある。徒らに外部へ外部へと現れ出るもろ〳〵の力よりも、內に籠つて「信」となつた靈の力の如何に偉大であるかについての實話は、昔から數多くある。私たちは、そこにもよく縮むものゝ彈力の强さを認め得るのである。

しかし、今日の社會を見渡す時、私たちはあまりに多くの人々が、徒らに外部への力の濫費をしつゝあるのを見る。かの石川啄木の歌のやうに、まだ咲くだけの力の充實に達しない花の蕾を火にあぶつてまでも咲かせようとしてゐるやうな焦燥に、あまりに多くの人々が煩はされすぎてゐる。安價な力の表現のいかに多すぎることよ。

此の意味に於て、私たちは現代の社會に向つて、經濟上の緊縮以上に、肉體上の、又精神上の力の緊縮の必要を感ずる。よく縮むものゝ強き彈力、それが今の社會には甚だ乏しい。角力でいふならば、睨み合ひが十分でない。ろくに睨み合はないうちに、いい加減に角力をとつてゐるやうな人があまりに多い。力を外へ働かすことばかり焦燥してゐて、內に力を充實させることを



徳富蘇峰
新聞記者
貴族院議員
名は猪一郎
文久三年(一八六三)
肥後國水俣町生

忘れてゐる。根強い働がなく、奥深い思考がない。つまり底力のある人や、底力のある働に乏しい。

底力のないといふことは、內奥に籠められてゐる力がないといふことである、眞の緊縮と充實とがないといふことである。

(靜と動との間)

## 二四　大死一番

徳富蘇峰

日本帝國の運命は、日本國民の自力に依りて支持せられ、繼續せられ、開展せらる。吾人が自力主義を主張するは、畢竟我自ら我を恃む外に方便も手段もあらざればなり。よし千百の方便手段ありとするも、その自力主義踐行の後に於て、始めて其の效用を見るべければなり。

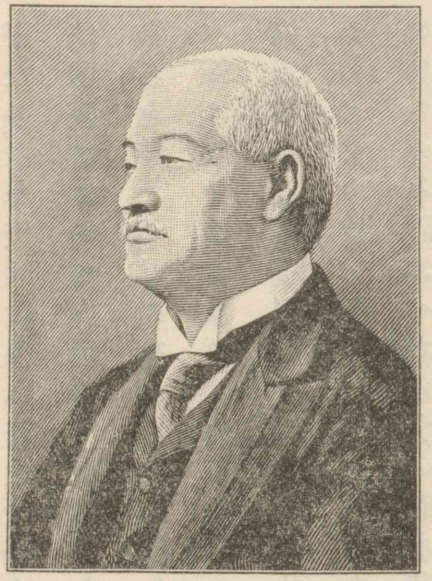
然りと雖も、吾人の所謂自力主義は決して自滿主義にあらず、自足主義にあらず。何ぞ況や鎖國主義をや、排外主義をや。吾人は、我が短を補ふべく、世界の總べての長を採らざるべからず。吾人は飽くまで籠城割據の風を破りて、世界と歩趨を一にせざるべからず。而もこれ唯内に自ら持する所ありて、而して後外に向つて之を求むべきのみ。

吾人は我が國民が精神的に獨立し、而して後、世界的に協調せんことを望む。精神的の獨立とは何ぞ。日本國民は日本國民として、其の獨得の立脚地に於て内外一切の經綸を定むること是なり。東洋の獨逸にあらず、東洋の英・米にあらず、日本は東洋の日本としてなり、日本の日本としてなり。即ち我自ら我が固有の歴史的系統に則り、我自ら我が國民的見地に依りて裁斷を下





すにあるのみ。かくの如く、内既に支持する所あり、乃ち外に向つて其の益を求む、必ずしも英・米と言はず、必ずしも、獨・佛と言はず、世界の長は皆採りて以て我が有と爲すべし。復何をか顧慮し、何をか遲疑せんや。



徳富蘇峰

惟ふに、我が國當今の憂は、第一、國民の惰氣滿々たることなり。別言すれば、國民猛志を銷磨し、小成に安んずるにあり。曰く、日本は既に五大國の一に位せり。曰く、日本は既に東洋の盟主たり。曰く、日本は既に富強なりと。而して更に磨礪自彊し、此の國運を進一轉せしむるを閑

待つあるを

故用レ兵之法無ク恃ニ其不ル來ムノヲ恃ニ其不ル攻ムノヲ恃ニ吾有ル所ル不レ可レ攻ム也。（孫子）

却しつゝあるなり。

第二、世界の大勢を根本的に謬解したるにあり。曰く世界は泰平なり。今後は戰爭らしき戰爭は絶無なるべし。國際的葛藤は聯盟によりて自動的に安排せらるべしと。彼等は其の待つあるを恃まず、其の來るなきを恃み、其の恃むべきを恃まず、恃むべかざるを恃むなり。

第三、我が日本帝國は世界に孤立せり。孤立といはんよりも多くの者より排斥せられつゝあるなり。これ必ずしも日本國民の罪とのみ謂ふべからず。而も其の原因はいづくにあるにもせよ、事實は正しく此の如し。而して我が國民が、かくの如き不愉快なる事實を正視し、認識し、之に處する所以の道を講ぜざるは何ぞや。



第四、我が國民は、物質的に驕慢となり、精神的に萎縮せり。退いて自力の足らざるを慚ぢ、自國の缺陷を補ふことを勗めず、進んで世界に向つて自國の眞相を闡明し、世界の誤解を正すことを努めず、たゞその日暮しに一時の苟安を偷取しつゝあるは何ぞや。

第五、一寸の蟲にも五分の魂あり。如何に世界の迫害を被るとも、我が國民にして自ら道義的大自信あらば、何をか懼れ何をか憚らんや。今日の憂は、日本帝國が世界的迫害の中心たるに非ずして、日本國民の道義的自信力の失墜にあり。蓋し、吾人が自力主義なるものは、內に國民の道義的自信力を扶植し、先づ自ら不敗の地位を占め、而して後、徐に外に向つて我が志を行ふにあるのみ。

アングロサクソン　第五世紀のころ獨逸の北西部より英吉利に來て今の英國を開いた民族　Anglo-Saxon

筆蹟　皇風洽ニ六合ニ　蘇峰

# 皇風洽六合

蘇峰

德富蘇峰筆蹟

かくの如くして世界と協調を保つべく、かくの如くして東洋の盟主たるべく、かくの如くしてアングロサクソン民族と角逐して世界の文明に貢獻し、大和民族の天職を全うするを得べきのみ。今日の如く我が國民自ら信ぜずして他を信じ、自ら賴まずして他を賴み、放恣怠慢、强ひて自ら欺いて眼前を糊塗し去らんとし、此の如くして止むなくんば、我が帝國は精神的に死亡するに至るべし。世界の歷史は進步の歷史なり、改善の歷史なり、向上の歷史なり。吾人は如何に一方に痛楚號泣するが如き現象を見るとも、他方には光明と平和との到來を疑ふ能はざるなり。但し之を果さんが爲には非常なる危險、非常なる艱難、非常なる苦痛を經ざるべからず。即ち今や吾人は此の一大試煉の時期に遭遇せるものなり。當面の問題は、我が日本國民が果して之に及第するか否かに在るのみ。

嘉永・安政の際に於て、我が日本は全く內憂外患の危機に擠されたりき。而も我が先人は種々の失敗・過誤を累ねたるに拘らず、遂に之を排除して維新中興の新局面を打開せり。顧ふに明治半百年に亙れる國運の增進は、固より明治天皇聖德の致す所なりと雖も、亦嘉永・安政より元治・慶應に至る國步の艱難によりて之を培養したるものと謂はざるを得ず。人は艱難に活きて安逸に死す。國も亦然り。英・佛兩國の現時に於て再生復活しつつある所以、亦固より大戰の大試煉を經來りたるが爲のみ。吾

人は之を我が國の過去に徵し、之を英・佛諸國の現在に徵し、我が帝國の前途に横たはる無數の危殆困難を豫想して、毫も自ら失望落膽せず。若し然る可き理由あらば、そは無數の危殆困難そのものにあらず、寧ろこれに氣附かず、空々寂々悠々寛々として、苟且偷安を事とする我が國民的精神の潰破これのみ。

我が國民が自ら冒進するにせよ、はた回避するにせよ、何れにしても我が國民的一大試煉の時期は既に到來しつゝあるなり。此の上の問題は果して國民的一大決心・一大努力・一大奮鬪もて之に打克たる可きかにあり。吾人は先づ我が國民が國運の消長興廢の十字街頭に立つことを自覺せんことを望む。次に此の國家的一大危機に向つて勇進し、潔く此の一大試煉に及第せんことを望む。而もこれ決して容易の業にあらざるなり。吾人日本國民は何れも國家的に大死一番して、而して後其の再生復活を期せざるべからず　如何に國家の難局を逃避すとも、來るべきものは遂に來らざるを得ざるなり。吾人は寧ろ今日に於て之を覺悟し、鐵石の心腸もて之に當る決心なかる可からざるなり。輕々しく其の趾を擧ぐる勿れ、漫りに其の腕を扼する勿れ。忍ぶべきは忍べ、耐ふべきは耐へよ。唯我が大和民族たるものは世界公論の容す所に據り天下の大道を行ひ、國際共通の正義を旨とし、以て我が所信を遂げよ。吾人は我が力を恃むと共に、我が正義を恃とす。かくの如くして與國の我を助くるあらば、與國と共にすべし。苟も與國なくんば我躬ら往くべき道を往かんのみ。

吾人は決して外患を恐れざるなり。若し眞に畏るべきものあ

らば、そは內憂にあり。內憂の中殊に畏るべきは國民的志趣の銷磨にあり。知らず、我が國民は大死一番以て自ら新生命を贏ち得る覺悟あるか。活裡死あり、死中活あり。生を欲する者は死、死を敢へてするものは生。國家の前途を解決すべき祕機は、唯此の死生の二字中にあり。（大戰後の世界と日本）

師範國文　第一部用　卷五　終

文部省檢定濟
昭和六年二月四日　師範學校國語科教科用

大正十四年十月廿七日印刷
大正十四年十月三十日發行
大正十五年三月十三日修正再版發行
昭和五年八月三十一日修正三版發行
昭和六年一月二十五日修正四版印刷
昭和六年一月二十八日修正四版發行

著作權所有

定價
卷一　金六十九錢
卷二　金六十七錢
卷三　金六十三錢
卷四、五、六、七、八　金六十一錢
卷九、十　金四十九錢

編者　吉田彌平
發行者　東京市神田區通神保町六番地　上原才一郎
發行所　東京市神田區通神保町六番地　光風館書店（電話麹神田三〇八七番）（振替口座東京三二七番）
印刷者　東京市神田區通神保町六番地　山崎與吉

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御註文被下候はゞ直に御送附可致候

庫
31
27
広島大学図書
2000301927